

よか ネット

NO. 46 2000. 7

(株)よかネット

もくじ

NETWORK

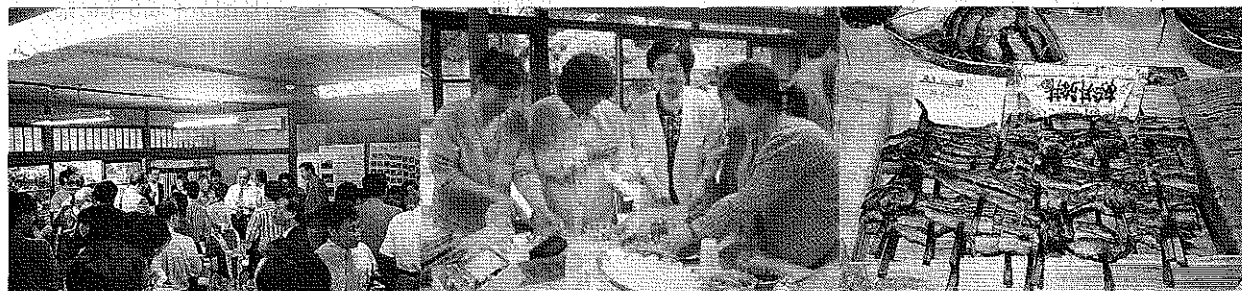
- 地域もどこと付き合えばプラスになるか考える時代に 4
- 年間80日の販売行脚を経て、顧客ネットワークで生きる道
～「ごっくん馬路村」の里をたずねて 2
- 地域を変える障害者1
いろんな種類の障害を持つ人が一堂に会す「ピアくるめ」..... 8
- 雨にも関わらず盛り上がりました
第8回よかネットパーティー 9

見・聞・食

- 戦争終結後25年のベトナムはいま
現代ベトナム戦争のフロントは覆面ライダーだった 11
- 麺には麺を葉には香菜を 13
- 海外医療サービス体験記 14
- 危ないようで危くない? ベトナム交通事情 16
- 骨董品にはご注意を 17
- 第3セクター研究会活動報告
『みんなに喜ばれるリフレッシュ施設をめざして
～八女市べんがら村』..... 18

近況

- 魅力ある学術研究都市をめざして
～九州大学学術研究都市シンポジウム～ 21
- 「川渡り神幸祭」での同窓会 22
- 地域の教育力のために大人が遊ぼう 23
- 沖縄の新たな一面にふれる ～西表先生 地域ゼミ～ 25



今年は120人の楽しい出会い

～第8回よかネットパーティー～

- ①会場の様子
- ②呼子からの手作りお菓子をワイワイ盛りつけ
- ③海を渡ってきたやきあなご
- ④出席者の自己紹介
- ⑤糸島産そば切り 右に見えるのはミャンマーそば粉
- ⑥手打ちそばに舌づつみ

①	②	③
④	コメント	
	⑤	⑥



地域もどこと付き合えばプラスになるか考える時代に 4

年間80日の販売行脚を経て、顧客ネットワークで生きる道～
「ごっくん馬路村」の里を訪ねて。

尾崎 正利

●村の人口の約200倍の通販顧客をもつ村

東京に出張に行ったとき、羽田空港から浜松町に向かうモノレールの車内広告で「じゃんじゃんと生きかえったぜ」というセリフが目飛び込んできた。みると純朴でいたずら小僧風の男の子が川遊びをしながら微笑んでいるポスターだ。発行は“コソコソがんばる馬路村農業協同組合”とある。

高知県安芸郡馬路村。半年前に『ごっくん馬路村の村おこし』（大歳昌彦著、日本経済新聞社）という本を何気なく買って、雑事にかまけて開けもせずにはあったらかしにしていたのを思い出した。最近、テレビでこの村のことを取り上げた番組も増えてきた。

ポスターをみてから福岡に帰って本を読んでみた。人口1,242人（平成7年）の小さな村が、なにやら大変な元気を持っているという様子が伝わってくる。

まえがきの文中には「通販顧客が全国各地に25万人というから村の人口の197倍だ」「町からこの村に嫁いでくる娘がいる。この村の付き合いの良さからいえば村と結婚するようなものだ」などと書かれている。同書で取り上げられている馬路村の元気をほんの一部だけ紹介すると、

○ 柚子の加工品で年間20億円を販売する農協をもっている。「ごっくん馬路村」という“村の公認飲料”も作っている。

○ 基本的に産地直送型の口コミ販売が功を奏し、今では25万人の顧客名簿をもっていて、季節の折々のお便り、催しごとの案内などしょっちゅう送っている。



一度見たら絶対に忘れられないJA馬路村の通販カタログ。

○ 県下15河川対抗の“利き鮎大会”では馬路村を流れる安田川の鮎が一番となった。毎年6月1日の鮎釣の解禁の前には、村の男達は仕事そっちのけで河原に泊まり込んで一番乗りを目指す。

○ 陸上競技の雑誌『RUNNERS』の誌上アンケートで「参加してみたい全国各地のマラソン大会」の前夜祭の部門で馬路村のフルマラソンが堂々一位に選ばれた。

○ 都会の娘が村の若者に嫁いでおり、一説では過去10年に7組ほども結婚している。

○ 日本の101村大賞（昭和62）、全日本DM大賞地方ブロック賞受賞（平成5）、朝日農業賞（平成6）、JRN明日のふるさとPR大賞優秀賞（平成9）を受賞している。

○ 過疎地にありながら、少年野球団が平成5年に県大会で優勝し、全国大会でもベスト8に進出した。カントクは現村長さんである。……etc

などとなっている。読んでいくうちに、ぜひ行ってこの目で確かめてみたいという気分になり、5月上旬に馬路村に行くことにした。

●県下のユズ加工品でダントツの売上げ。商品ごとのランキングではトップ10位中8つを占める。

行く前に予備知識をと思って、高知県の農業政策課から統計を送っていただいた。柑橘系の果実だけでも、ぼんかん、文旦、日向夏、柚子は国内有数の産地であり、さすが南国土佐である。とりわけ柚子は全国シェアの4割を占める。柚子の出荷は大別して「柚子玉」か「柚子加工品（果汁、皮、種）」の2つで行われるが、生食専用の柚子玉はキズや皮のヒビ割れなど見栄えの良さも市場での取引に影響する。

平成10年度の県下の柚子加工品の一覧では、12市町村の農協・団体が加工品を製造しており26億円を販売している。そして、この8割近くにあたる20億7千万円をJA馬路村が占めている。

柚子以外の素材を含めた個別の全農産加工品の販売額順位でも、JA馬路村が販売する「ゆずの村ポン酢しょうゆ」は10億9千万円で1位、「ごっくん馬路村」は

社名変更のごあいさつ

弊社は、1976年に(株)地域計画建築研究所の九州事務所として出発しましたが、1982年に(株)九州地域計画建築研究所として独立し、その2年後の1984年にはネットワークづくりや地域づくりの拠点となる事務所を目指し、(株)九州地域計画研究所と社名を変更し、16年が経ちました。

この間、九州を中心に、人と人のネットワークづくり、いろいろな人との出会いを大切にしながらも、多くの方々のご協力、ご支援によって、会社を続けることができたことに感謝しております。

さて、これまでの会社の礎づくりの中心として活動をリードしておりました糸乗貞喜が、昨年度より代表取締役を退き、山田龍雄（代表取締役社長）と山辺真一（代表取締役専務）の2人体制で進めております。

これまで、地方色を大切にしたいという思いと、九州内あるいは九州と外をつなぐネットワークの一助になればという気持ちで創ってこられた「手づくり」の機関誌「よかネット」が、創刊以来8年を迎えました。

しかし、最近、「よかネット」という名称が商品名などにも使われてきており、この際、対外的にもきちんとしたいということ、さらに、これまで以上にネットワークづくりや地域づくりの拠点として活動していきたいという思いで「よかネット」を正式な社名とし、名実共に地域づくりのネットワーク会社とすることに致しました。

なお、機関誌「よかネット」だけでなく、情報の発受信手段として、ホームページも開設し、これからも人と人のネットワークを大切にしながら、より良い地域づくりに取り組んでいくため、所員一同精進していきたいと思っています。

今後とも倍旧のご支援のほど賜りますようお願い申し上げます。

平成12年6月1日

よかネット

代表取締役社長	山田 龍雄
代表取締役専務	山辺 真一
取締役	伊藤 聡
取締役	尾崎 正利
取締役顧問	糸乗 貞喜
所 員	一 同

4億円で3位、上位10品目のうち実に8つをJA馬路村が手がける商品が独占している。

基本的に素材は柚子が基本であるのだが、小さな村の農協が手がけるにしては品目数、販売額ともに多いなあという印象をまず最初にもった。

●かつては1つの村に2つの営林署がある「林業立村」

馬路村は山の中にある。高知市から車で東、室戸岬に向かう国道55号を1時間半ほど走ると、途中で安田川の河口に面した安田町がある。ここで進路を左に向けて清流沿いを山中に向けてひたすら進んでゆく。

周囲の景色は、平地がちでハウスと田植え作業ののどかな風景から、だんだん山がちで谷筋ばかりの風景へと変化してゆく。

30分ほど車を進めると、谷筋に形成された細長い集落がみえてくる。これが馬路村の馬路集落（人口953人）である。この村にはもう一つ、馬路集落から車で30分ほど先にある魚梁瀬集落（人口289人）もある。

今回、役場で話を聞く約束をしていたので立ち寄る。総務課の木下彰二さんが親切に応じて下さった。本で得た話ぐらいしか知らないもので、いきなり「本の中で書かれていることは本当なのでしょうか」とぶしつけ

な質問を浴びせてしまう。木下さんは笑いながら「まあ雰囲気としてはあっています。まずは資料をご覧下さい」といって以下のような説明をして下さった。

- ①馬路村は165.52平方km。国有林が村土の75%を占める。昭和30年代まで馬路と魚梁瀬に別々に営林署が置かれ、杉材を中心とした林業が盛んだった。
- ②日本三大杉美林のひとつ魚梁瀬杉があり、樹齢200年を超えるものもかなりあった。
- ③林業の雇用力は大きく昭和35年頃に約1千人が林業関連の仕事に就き、村の人口も現在の3倍にあたる3.4千人もいた。平地がほとんどなく農業は「片手間」的であった。今なお専業農家は少ない。JA馬路村でさえ製材加工部をもって製材事業を盛んに行っていた。
- ④柚子は営農指導の一環で昭和30年代に生産部会ができた。村の森林組合が苗木を育て、村が苗木代金を補助し、農協が販売する取り組みでスタートした。当初は大分県大山町の果樹による山村振興などを見習おうということだった。
- ⑤10年ほど育って実がつくと、各農家で手作業で果汁を絞って農協に出荷していた。柚子酢の一部は大手の醸造会社にも売られた。

柑橘系果物の出荷量の推移（全国）

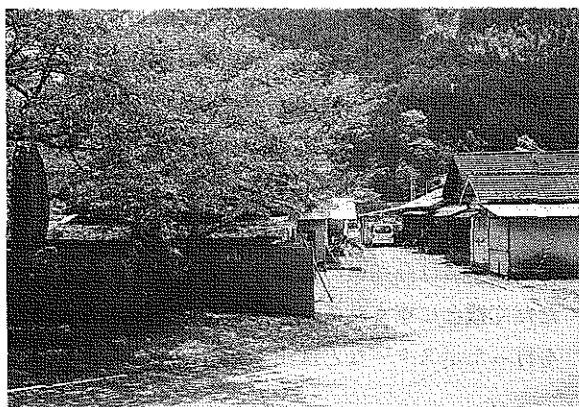
	平成8年					平成9年					平成10年					
品目	順位	県名	作付面積 (ha)	全国比率 (%)	生産量 (t)	全国比率 (%)	県名	作付面積 (ha)	全国比率 (%)	生産量 (t)	全国比率 (%)	県名	作付面積 (ha)	全国比率 (%)	生産量 (t)	全国比率 (%)
かんしゅうみ	1	愛媛	9,820	14.4	167,400	14.5	愛媛	9,510	14.4	250,400	16.1	愛媛	9,290	14.5	181,900	15.3
	2	和歌山	8,450	12.4	162,000	14.1	和歌山	8,270	12.5	225,000	14.5	和歌山	8,090	12.6	160,400	13.5
	3	静岡	6,990	10.3	140,000	12.1	静岡	6,840	10.4	152,700	9.8	静岡	6,740	10.5	149,600	9.8
		19位 高知	540	0.8	11,300	1.0	19位 高知	513	0.8	13,200	0.8	19位 高知	502	0.8	10,600	0.9
		全国計	68,000	100.0	1,153,000	100.0	全国計	66,000	100.0	1,553,000	100.0	全国計	64,200	100.0	1,192,000	100.0
ぼんかん	1	鹿児島	1,054	35.2	10,901	33.9	鹿児島	1,068	35.5	10,230	31.1	鹿児島	989	33.5	11,287	29.6
	2	愛媛	464	15.5	5,085	15.8	愛媛	477	15.9	6,227	18.9	愛媛	482	16.3	7,279	19.1
	3	高知	226	7.5	3,390	10.6	高知	196	6.6	6,530	10.7	熊本	290	9.8	4,019	10.5
	4	宮崎	143	4.8	1,750	5.4	熊本	281	9.3	3,302	10.0	高知	194	6.8	3,410	8.9
		全国計	2,997	100.0	32,200	100.0	全国計	3,006	100.0	32,866	100.0	全国計	2,954	100.0	38,153	100.0
文旦	1	高知	444	78.0	7,200	83.1	高知	448	77.8	7,750	84.4	高知	450	78.4	7,950	88.3
	2	鹿児島	72	12.7	507	6.6	鹿児島	72	12.5	878	9.6	鹿児島	67	11.7	650	7.1
	3	愛媛	17	3.0	192	2.5	愛媛	17	3.0	232	2.5	愛媛	18	3.1	252	2.7
	4	宮崎	18	3.2	160	2.1	宮崎	17	3.0	174	1.9	宮崎	17	3.0	154	1.7
		全国計	569	100.0	7,735	100.0	全国計	576	100.0	9,185	100.0	全国計	574	100.0	9,214	100.0
日向夏	1	宮崎	149	30.7	2,408	43.9	宮崎	149	30.6	2,355	44.0	宮崎	149	31.3	2,134	46.7
	2	高知	121	24.9	1,510	27.6	高知	120	24.9	1,380	25.8	高知	114	23.9	950	20.9
	3	福岡	98	20.2	609	11.1	静岡	99	20.3	590	11.0	静岡	99	20.8	656	14.4
	4	愛媛	57	11.8	578	10.5	愛媛	56	11.5	524	9.8	愛媛	55	11.6	455	10.0
		全国計	485	100.0	5,479	100.0	全国計	487	100.0	5,358	100.0	全国計	476	100.0	4,569	100.0
柚子	1	高知	555	27.6	5,390	38.4	高知	560	28.4	7,120	48.6	高知	569	28.4	7,600	42.8
	2	徳島	374	18.6	3,790	27.0	徳島	342	17.3	2,942	20.0	徳島	359	17.9	3,892	21.9
	3	愛媛	155	7.7	951	6.8	愛媛	163	8.3	1,006	6.9	愛媛	180	9.0	1,478	8.3
	4	宮崎	124	6.2	804	5.7	宮崎	125	6.3	712	4.8	宮崎	127	6.3	959	5.4
		全国計	2,013	100.0	14,026	100.0	全国計	1,975	100.0	14,686	100.0	全国計	2,001	100.0	17,769	100.0

1998年度（平成10年度）農産物加工品一覧表
（販売額10,000千円以上）

順位	品名	製造者名	市町村	年間販売額 (千円)
1	ゆずの村ペンションゆず	J A 馬 路 村	馬路村	1,095,909
2	ゆず果汁	J A 土 佐 あ き	安芸市	481,350
3	ぶどう馬路村	J A 馬 路 村	馬路村	407,259
4	ぶどうセット	J A 馬 路 村	馬路村	341,054
5	濃縮ゆずジュース	J A 馬 路 村	馬路村	83,833
6	菓子(梅)	梅 倶 楽 部	中土佐町	81,000
7	ゆず酢	J A 馬 路 村	馬路村	50,790
8	ゆず皮加工品(ジャム・みそ・佃煮)	J A 馬 路 村	馬路村	50,163
9	乾燥ゆず皮製品	J A 馬 路 村	馬路村	33,059
10	はちみつゆず	J A 土 佐 あ き	安芸市	31,340
11	漬け物しょうが	J A 四 万 十	窪川町	30,000
12	四万十川うどん(じねん・青のり)	四万十の里組合いろいろ屋	西土佐村	27,587
13	アイスクリーム	グ ル ー プ ふ あ る	安芸市	20,000
14	黒砂糖	大 方 精 糖 生 産 組 合	大方町	17,130
15	ひがしやま	電ヶ迫ひがしやま生産グループ	大月町	14,000
16	こんにゃく	池川町地場産品加工組合	池川町	13,400
17	豆腐	JA土佐れいほく大杉支所加工場	大豊町	12,902
18	焼き肉のタレ	J A 四 万 十	窪川町	11,000
19	ゆず種	J A 馬 路 村	馬路村	10,200
20	謝肉祭(焼き肉のタレ)	JA土佐れいほく大川支所	大川村	10,000
21	ゆずドリンク	小浜生産グループ	物部村	10,000

- ⑥ 柚子の生産は軌道に乗ったが、今度は全国的な柚子の豊作のたびに値崩れを起こすようになる。数年おきの豊作はそのつど生産者、農協を苦しめるようになった。中でも昭和54年の豊作は翌年まで大量の在庫が残り、JA馬路村ではデパート等の催事に出かけて行き、商品売ってまわった。
- ⑦ はじめは、柚子を懐かしんでもらえる四国出身者が多い近畿地区、そして西武系列のお店で注目された東京方面での販売が中心だった。一度買ってくれた

- お客さんが直接TELやFAXで注文してくれるようになった。直接注文のお客さんは全て名簿にまとめて、今では季節の通信、遊びの誘いなど、商品販売以外の面での情報交換も行うようになった。
- ⑧ 本当はDMを出して売り込もうという考えもあったが、はじめはDMを出す相手もいなかった。結局、今まで注文を頂いていたお客さんを中心に、少しずつファンを増やそうと、季節の通信、遊びの誘いなどの心の交流としてDMを送るようにした。
- ⑨ DMは村役場、農協、森林組合で出しており、村のDMの返信ハガキの宛先は馬路村村長となっている。商品の注文だけでなく、叱咤激励、商品開発のヒントなどの点でも役に立っている。最近では「〇月〇日に遊びに行くのでよろしく」といった来村予告のハガキもあるそうだ。
- ⑩ 首都圏を中心にしたインパクトのあるポスターや、テレビCMの紹介によって、元気のいい村として紹介される機会が増えた。リトルリーグでも全国大会で上位に進んで、過疎で僻地で自然がいっぱいという環境が、逆に子どもを育てる絶好の環境として評価されて、馬路村の農家に嫁いでくる女性（過去7組の夫婦）、親子そろって山村留学に来る家族（過去4～5世代）もでてきた。



営林署の職員住宅跡

①地域最大の問題は、職場の数の確保と人口減少のくい止めである。村では平成13年度を目標に次期総合計画の策定を進めている。村のファンを増やして馬路村が注目されるような地域づくり、そして定住の村づくり、というビジョンでポイントになるとみられる。

ひと通りの説明を終えたのち「都会の人がどうしてこんな山と川しかない村のことを気に掛けてくれるのだろうか、とも思います」と木下さんは言う。

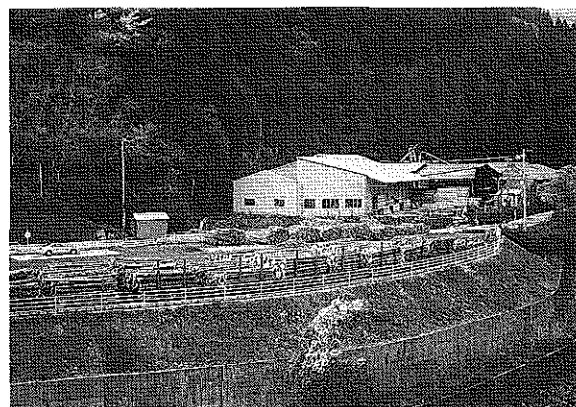
「村の人たちの気分としては、フルマラソン大会や鮎の解禁日、その他休日などではるばるこんな山の中に来て下さる人と触れあうことが何よりの元気の素になっているようです。注目されれば小学生からお年寄りまでみんなはり合いが出るみたいです。盆と正月のような気分でしょうか。」

話を聞き終えて役場を出て、自動販売機で「ごっくん馬路村」というドリンクを買って飲んでみた。

一口飲むと柚子の香りが口からノドにかけて鮮やかに伝わる。また一口飲むと商品開発の段階で苦労したという「限りなく水に近い」喉ごしだ。

こうした馬路村の柚子加工品を普通の流通品として不特定多数に売ったり、原料を大手食品メーカーに納入するだけであったならば、肝心の生産者はどこの誰が買ったかも知れず、お客の反応さえ知れず、結局は作って出荷するだけの無味無感のものだったかもしれない。

あらためて村の中心部から周囲の山を見渡すと、本当に緑と川だらけの景色である。人の住む集落は谷筋に段々状に形成された狭い平地に集中している。村全体の人口密度は低いかも知れないが、この密集の具合



安田川沿いにある村内有数の規模の製材所。今でも林業関連の仕事につく人が事業所統計ベースでても400名ほどいる。

からみて、人が住む集落の人口密度は結構高いのかもしれない。

●昭和56年に始まった柚子加工品の製造と販売。はじめは年間80日にもなる出稼ぎ販売行脚であった。役場の木下さんにいただいたJA馬路村が発行している小冊子「村おこしの軌跡」と「みんなのおかげです」を宿で読んでみると、JA馬路村が長い苦労を経て今日の成功を得たことが詳しく記されている。

制作者の思い入れがたっぷり詰まったこの小冊子の全てをご紹介することはできないが、私なりに印象に残ったことをまとめると以下ようになる（一部、木下さんの説明とも重複する）。

①柚子加工品は昭和50年頃に柚子酢製造ではじまった。

当初は昭和30～40年代に植えた柚子の木が成長し、ようやく果実を得るまでになった。しかし、柚子酢は柚子果汁絞りから瓶詰めや出荷を馬路村農協がリードして行ったが、当の農協も販路をどうつくれば良いか全く知らなかった。

②昭和54年に柚子が豊作で値段が暴落し、大量の在庫が発生。農協では組合長が号令をかけて、当時の販売係長（東谷望史現営農販売課長）らがトラックに柚子酢を大量に積み込んで夜間に出発、徳島から船に乗り明くる朝から神戸や大阪の百貨店の催事で一週間売りまくる、という販売部隊の出動を年間80回も繰り返していた。

③それでも一日の売上は8千円などという日もあった。

④昭和61年、土佐のかつおや野菜に合う調味料として柚子酢と本醸造醤油を使った「ぼん酢しょうゆ」を商品開発し、これが西部百貨店の「日本の101村展」で大賞を受賞し注目される。

⑤昭和62年、再び柚子の大豊作。「次に新しい商品開発をせねば」ということで、柚子酢と安田川の名水、蜂蜜を使ったドリンクを開発する。「村の子ども達が毎日飲んでも飽きない安全なドリンクを作ろう」といって試行錯誤した。

⑥ごっくん和一息に飲むことができる喉ごし、そして村のドリンクということにあくまでこだわって「ごっくん馬路村」を村の公認飲料ということで昭和63年に発売開始。

⑦製品のラベル、ポスター、コピーなどのデザインは昭和63年にJA馬路村が高知市内のアーキデザイン研究所と年間契約を結び、同研究所の松崎了三さん、田上泰昭さん（田上さんはのち独立しパオデザインを設立）の2人が中心となって手がける。お2人はその後もテレビCMやイベント、販売戦略などで貴重な「ブレン」となり見るべき効果を挙げる。

⑧「ごっくん馬路村」は販売にあたってロットや製品

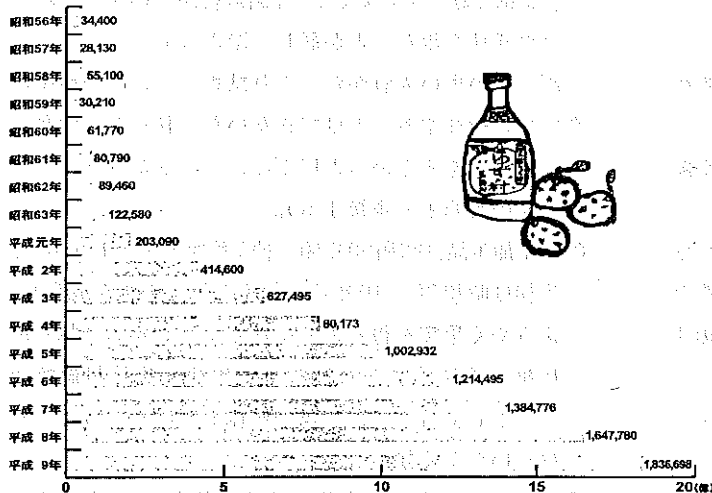
原価の面で、普通の流通にのせる取引は無理ということになった。このことが、かえって消費者への直接通販による販売という独自の戦略を生むことになった。

⑨小学生、農家のお年寄り、保育園児など“純村民”が登場するJA馬路村のCMが県下でまず話題になり、次第に県外にも知られるようになった。

⑩平成元年には高知県の国体で皇太子殿下に飲んでいただく機会に恵まれる。首都圏を中心に消費者の心を打ったポスターなどは注文を飛躍的に伸ばす。

役場でお話を聞いた木下さんに翌朝JA馬路村の加工場を案内していただくことになったが、流れ作業の中で忙しそうに働く加工所の職員さんたちの表情が非常に明るい。最近視察が多くなっているということで、適度な緊張が作業能率を上げているようにも見える。最新設備を備えた加工場であるが注文が集中するお中元、お歳暮シーズンにはパニック状態の忙しさだという。

柚子加工品販売の推移（昭和56年～平成9年）単位：千円



県内外宣伝販売・物産展への参加実績

年度	高知県内 (延日数)	県外 (延日数)	備考
昭和55年	10	0	当初、県内だけのアプローチを試みる。
昭和56年	6	40	瀬戸大丸の物産展、そして関西地区でのアプローチをスタート。
昭和57年	8	56	関西中心に積極的に販売を試みる。
昭和58年	12	72	初の東京への売り込みであったが、厳しい結果となった。
昭和59年	42	88	北九州へも進出、高知県内イベントへの参加が増える。
昭和60年	45	85	いよいよ県内が本格的に売れ出した。北陸にも販売に行く。
昭和61年	42	82	東京での販路拡大に再挑戦、よいしやるぞ。
昭和62年	38	85	東京での確かな手応えを感じる。大きなマーケットが広がっているぞ。
昭和63年	18	80	いよいよ本格的に東京で売れ出した。東京は広い。
平成元年	18	72	新しい販路として東北地方へも参入する。
平成2年	15	62	ついに本州を飛び越し、北海道へ。
平成3年	15	27	急激な受注増加で生産が間に合わず、物産展などへの参加を減少させる。
平成4年	12	21	県外での年間販売日数を夏期の20～30日に限定する。
平成5年	10	27	生産・出荷に遅れ、依頼のあったイベントのみの参加が中心となった。
平成6年	12	33	市場開拓を見直し時期だと判断し、再度積極的に県外へ。
平成7年			
平成9年	約10	約80	お客様の声を聞き、商品に活かしてゆく事を第一に全国の物産展・イベントに積極的に参加・活動中！

ゆずのあゆみ

- 昭和40年 ●ユズの栽培が盛んになる。
- 昭和50年 ●農協の工場でユズの搾汁を始める。
- 昭和54年 ●農産加工を始める。第1号商品「ゆず（個装）」を発表する。
- 昭和55年 ●京阪神にユズのPRに行く。
- 昭和56年 ●工場を増築し、加工機械を導入する。
●全国に向けた産地直送事業に手探りで取り組み始める。
- 昭和58年 ●ユズはやっぱり加工せなあかんということになり、ゴツゴツやり始める。「ゆずみそ」と「ゆずジャム」をつくる。
- 昭和60年 ●ユズの濃縮ジュースを発売する。同時にギフト用ユズ製品の発売も行う。
- 昭和61年 ●ボン酢しょうゆ「ゆずの村」を開発する。
- 昭和62年 ●「ゆずの村」ストレートドリンクを開発する。
- 昭和63年 ●商品企画・デザインの外部ブレンと契約を結ぶ。
●ボン酢しょうゆ「ゆずの村」は日本の101村展で最優秀賞を受賞。この時を境に、ユズの産地が変わり始める。
●産地直送事業でコンピュータを導入する。
●売り上げがやっと1億円を超える。
●「ごっくん馬路村」が完成する。
- 平成2年 ●「ごっくん馬路村」が日本の101村展で農産部門賞を受賞するなど、人気者になる。
- 平成3年 ●中元・歳暮時に製造が間に合わず、パニックになる。
- 平成4年 ●加工品の伸びが限調なことから、村をあげての増産計画に入る。
- 平成5年 ●新加工場完成。
●「うまじ村のゆずゼリー」発売。
●売り上げが10億円を突破する。
- 平成6年 ●売り上げが12億円に伸びる。
- 平成7年 ●平成6年度朝日農業賞を受賞。
●「ばつと馬路村」を発売。
- 平成8年 ●柚子廃棄物利用堆肥センター完成。
●柚子皮乾燥施設完成。
- 平成9年 ●売り上げが18億円に伸びる。
●「馬路のゆず湯」発売。
- 平成10年 ●広域農協合併への不参加。
●「ゆず茶漬」「ゆずこぶ茶」「ゆず一夜漬」発売
●「ゆずドレッシング」発売

百貨店めぐりをやっていた頃は、一生懸命やっても日に8千円、一週間で5万円という日々もあったという。年間80日間も販売部隊が商品を抱えてまわっていた時代に比べると、村に全国から注文が舞い込み「ごっくんの里」を尋ねて数は少ないが都会から人が訪れて来るようになっている。そして一時期減らしていた外商を再び平成7年頃から増やし、お客との会話によってよりよい商品づくりへとつなげる取り組みを進めつつある。

木材と柚子の素材・モノ出荷型の地域が、出稼販売型の道を歩み、今は感動を送り全国に仲間を増やし、都会の人と直接情報をやりとりする全国区の「むら」へと変貌している。

●村の入り口にむらの物販・情報センターがある

今回、最初に村に入ったとき、集落に入る直前ある橋を渡ったところに「まかいちよって家」という看板がかかった木造の新しい建物が建っていた。中に入るとカウンターの中で女性2人が電話でにこやかに対応しながらもこちらには目線で会釈してくれた。ひとつの電話が終わるとまた次々に電話。対応の様子から察して、連休中の宿の空き状況、村の観光みどころ、イベントの問い合わせ、柚子加工品の注文についての問い合わせのようだ。

実は私もここに来る前に村の観光パンフを電話で問い合わせた郵送で送ってもらったのだが、実にソツのない対応だった。どの宿なら空いているという情報まで教えてくれた。

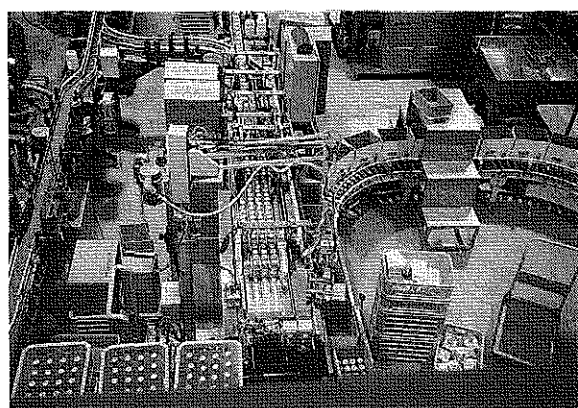
少し手が空いたようなので、普段はどんな問い合わせがどのくらいあるのか聞いてみると「普段はこんなに電話はないのですが、注文のハガキ、村への意見、ごっくん馬路村への感想なども全国から届きます」という。やはり全国区である。

建物の2階には簡単な会議室ふうのスペースがあり、私が訪れたときには男性が数人、熱心に何か議論していた。パンフレットは役場が作った観光案内、農協が作った柚子加工品の紹介、森林組合が作った木工品の紹介、温泉センターが作った施設案内などである。

ここはまさに村の入口であり村のセンターでもある。ただ観光協会用のスペースがあります、という形式的な感じではなくきちんと地域の内外の人の情報を突き合わせる場になっている。

●何もないけど清々しい気分になる村だった

最初、失礼ながら正直に言えば馬路を「うまじ」と



農協の加工場で「ごっくん馬路村」の製造ライン。平成5年に出来た新しい施設。

はなかなか読めなかった。「ごっくん馬路村」を飲んだこともなくて本での聞きかじりの知識だけで行ってみたのだが、ノンビリした時が流れた美しい村だった。

役場の木下さんの話では、村の雇用確保と人口確保が急務の課題であるという。村には今なお魚梁瀬地区に営林事務所があって、林業と木工品は村の一大産業である。これに農協をはじめとした柚子加工品、旅館などのサービス業、この3つが外貨稼ぎの柱である。そんな中「馬路の出身者以外でもここに住みたいという人が出てきた」という話もある。本籍者の多くが都会に出てしまった今、馬路村では第2本籍者ともいうようなふるさとづくりも、人々に喜ばれる道のひとつなのかとも感じた。

「何もない村ですけど最近はおかげさまで都会からもお客様がいらっしゃるようになりました」と魚梁瀬で泊まった旅館『満木荘』のおかみさんは言っていた。

私が泊まったのは平日でお客さんは私一人だけだったが、夕食はその辺の山菜を集めた天ぷら、安田川の天然ウナギ、ヤマメ、筍などで大変美味しかった（安田川の河口の安田町には銘酒・土佐鶴の酒造もあって宿ではおいしい酒を飲ませていただいた）。

何もないけど人がいい、何もないけどうまいものがある、何もないけど清々しい気分になる、こうした条件を持つところは、本当に少なくなっている。

今回は上れなかったが魚梁瀬集落の上には林木遺伝資源保存林として永久保全が決まっている日本三大杉美林のひとつ千本山がある。明け方の霧に包まれた千本山をはるか遠くから眺めていたが、なるほど仙人でも住んでいそうな雰囲気だった。（おざきまさとし）

地域を変える障害者1

いろんな種類の障害を持つ人が一堂に会す

「ピアくるめ」

澤谷 真紀子

ある町で障害者福祉計画のお手伝いをしている。そのため、障害のある人がどのような取り組みをして、どのようなことを考えているのかについて多くの方にお話をうかがっている。バイタリティがあって、目が輝いている人が多いと感じた。このような人や活動をもっと知って欲しいと思い、今号より連続で紹介しようと思う。

●いろんな種類の障害を持つ人が集まり、相談を受けつける「ピアくるめ」

福岡県久留米市には市が設置し、18の障害者グループが運営する相談窓口がある。市の身体障害者自立支援事業によるもので、地域での自立生活を支援するために、介助サービスの利用援助や、生活相談などを行っている。この窓口を「ピアくるめ」という。ここでは、長年共同作業所に勤めていた健常者の女性が常勤で、体幹機能に障害を持っている方が非常勤で働いているほか、不定期にピアカウンセラー（計24名）が相談に対応している。平均して1月当たり30件の相談があるそうだ。

また、この事業は、身体障害者の事業ではあるが、知的障害や精神障害を持っている方でも利用している。

ピアくるめ運営委員会事務局長であり、自立生活センター久留米（※）、共同作業所フロンティアの代表で

ある古川さんにお話をうかがった。特に、ピアくるめの準備段階、体制を整えるまでの話が興味深かった。

●色々な障害を持つ人が、まずは集まってみた

ピアくるめは開設するまでに1年半の準備期間があった。この間、知的障害者や精神障害者、身体障害者でも肢体が不自由な人、視覚障害者、聴覚障害者、加齢による障害を持つ者などのグループ（この時点では17グループであった）の代表が一堂に会し、何度も議論を交わした。色々な障害を持った人がお互いに話しあう機会は少ないらしい。障害者を取り巻く環境として、古川さんは次のようなことを指摘していた。

- ・障害者同士は身体障害者と知的障害者、精神障害者が互いに交流がないのが現状だ。そのため互いの関係が分断しているように思う。お互いに歩み寄る場がないため、同じような障害を持つ者同士で集まりやすい。

- ・障害者はよく子ども扱いされやすい。介護者と病院に行くと、看護婦が症状を介護者に尋ねるといふことがよくある。

- ・長年、障害者と健常者は接点が少なく過ごしてきた。お互いに未知の世界が多い。お互いを知るためにも何でもとにかくやってみる、という挑戦が必要だろう。

つまり、ピアくるめの準備会では、同じ障害をもつもの同士、同じ問題を解決しようとする者同士が集まり密度を深くしてきた障害者が、その枠を越えて歩み寄る機会を持ったということだろう。

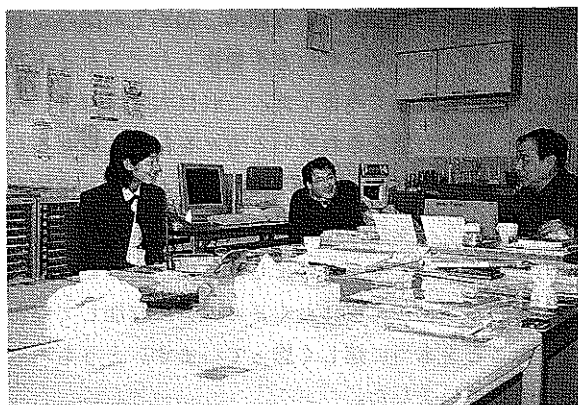
そこでは、障害者でも歩いて当たり前、話が出来る当たり前と考える人が音声・言語が不自由な人の思いをどのように受け止めるか考えたり、精神障害者と初めて向き合ったり、バリアフリーを考えるにしても、車



ピアくるめの概要



共同作業所フロンティアと代表の古川さん（右端）



ピアくるめ。相談室を別に確保している

いすの人と視覚障害の人では段差のあるなしに大きな違いがある・・・など多くの歩み寄りがあり、課題が出てきたそうだ。ただし、「最初はケンカばかりだったんですよ」とも古川さんはおっしゃっていた。

※) 自立生活センター（通称CIL）：障害者が地域で自立した生活を送れるようサポートする組織。全国的な広がりをもてる。障害者が地域で自立生活センターを設置し、相談や自立生活プログラム等様々なサービスを行う。

●開設後は運営委員会をつくった

ピアくるめ自体は、職員の人件費、ピアカウンセラーの礼金（交通費にもならない）等を市からの補助金でまかなっており（施設は市所有のため賃貸料無し）、市側は金を出す口は出していない。めでたくピアくるめ開設の運びとなると、準備委員会はそのまま運営を行う「運営委員会」となり、月に1度、運営方針や相談内容についての検討を行っている。また、それぞれのグループの代表者はピアカウンセラーとして、時間の許す限り、ピアくるめで相談を受け付けている。

●ピアくるめ設立のメリット

設立のメリットとして次のようなことをおっしゃっていた。

- ・ 障害者同士の交流がなければわからない地域の問題点が浮き彫りにされるため、対応を考えることができる。
- ・ 障害者が運営することで、相談する側も相談しやすく、口コミで広がりやすい。
- ・ 病院や施設、市役所ではできないサービスが考えられ（例えば精神障害者の話を聞くこと等）、きめ細かな対応ができる。
- ・ 障害者手帳に該当しない人、高齢者福祉に該当し

ない人で本当に困っている人がいることがわかった。等

障害者の計画では、現状から出てきたニーズや問題の多くが解決の必要性の高いものだと思う。ただし、最優先に何を解決するのかという優先順位をつけ、実行に結びつけることが重要だ。ピアくるめで行われているような障害の枠を越えた取り組みは、何が最優先課題かを見極め、障害者が納得のいく地域づくりが可能となると思う。ただし、このような会をまとめるのは難しいので、地域でうまくとりまとめる人がいるかどうかが問題となる。実は、久留米周辺の筑後地域も含め、県内には障害を受けとめながら戦ってきた人達がいる。今後、そのような人達の地域での取り組みを紹介していきたい。（さわたにまきこ）

雨にも関わらず盛り上がりました

第8回よかネットパーティー

梶原 里香

5月27日は朝からあいにくの大雨。「何でよりによってこんな日に雨が降ってるんだ。こんな雨の中みなさんはパーティーに来てくださるのだろうか」という気持ちで、私にとって初めての「よかネットパーティー」の朝を迎えました。入所して2か月。なかなか外に出る機会がないので、どれくらいたくさんの人にパーティーでお会いできるんだろう、どんな方がパーティーに来られるのだろう、とこの日を本当に楽しみにしていました。

●えっ！もう始まったの??

幸い、パーティーの準備を始める頃には小雨になっていました。私は会場の中で、当日みなさまにお配りした有田焼のお皿を机に並べていたのですが、そのお皿の枚数の多いこと！今年は例年に比べて「参加します」というお返事を下さった方が多いとのことでした。お皿を並べながら、「今からこれだけの人でこの会場が埋まっていくんだ」というのをすごく実感していました。

準備が進んでいくにつれて、会場にいる人の数がどんどん増えてきました。受付をしたり、持ってきていただいた料理をお皿に盛りつけていると、山田がパーティー開始の挨拶をしていたのでびっくり。もうそんな時間になっていたんだ、と自分が時間感覚を失っていたことにそのとき気がつきました。開始の段階で、約50人くらいの方が会場にはおられました。それだけの

人数でもちょっと狭く感じられた今年の会場（みなさんもそう思われたのではないのでしょうか?）。これからもっと人が増えていくというのに、ちゃんとみなさんが会場の中に入ることができるのかなぁとそればかりを心配していました。

●料理がテーブルにのらない!!

参加してくださる方が多いということは同時に、みなさんが持ってきてくださる料理の数も多くなるということになります。料理を盛りつけるまではいいものの、それをテーブルに置く場所がなかったのです。私はみなさまが持ってきてくださった料理の写真を片っ端から撮っていたのですが、あまりにも数が多すぎて、撮ったものとまだ撮っていないものとの区別ができなくなってしまいました。料理の写真を撮ったり、盛りつけはしていたもののあまり料理にありついていない私。「おいしそうだなぁ」と思うだけで、目の前をどんどん料理が通り過ぎていっているといった感じでした。今年は悔しい思いをしたので、来年はちゃんと仕事をしながら、料理も堪能したいと思っています。

●あちこちで見られた「人もうけ」の輪

「よかネットパーティー」は「人もうけ」をする場です。みなさんそのことをよくご存じのようで、会場内の至る所で「人もうけ」の輪を見ることができました。このパーティーで、新しい人のつながりができていくというのは、私たちにとっても本当に嬉しいことです。「私も輪の中に入りたーい」と思ったのですが、なかなかその時間がとれませんでした。ただ、会場内をウロウロしていると、「この間よかネットに写真がのってましたね」と声をかけてくださった方が何人かおられました。これは本当に感激しました。こういったところから、人と人のつながりができていくんだらうな、とい

うのを考えた瞬間でした。今回は、初めての試みとして、パーティーに来られた方を撮影したポラロイド写真を会場内にはってみました。これは大変好評で、その写真の前でお話をされている方々を何度も見ましたし、「また来年もやってくださいね」とおっしゃる方が多かったです。最終的に、パーティーには120人近くの方が足を運んでくださいました。雨が降っていたにもかかわらず、こんなにたくさんの方に参加していただけただけを本当に嬉しく思っています。どうもありがとうございました。

まだまだこれからも続いていくであろう「よかネットパーティー」。「ここはこうしたらいいんじゃないの?」とか、「こういう企画があったらもっとおもしろいのに」といったご意見などございましたら、遠慮なさらずにどんどん、お寄せいただきたいと思います。

●最後に反省会

さてさて、今年で8回目となったよかネットパーティー。参加してくださったみなさまからは、いろいろなところでお会いしたときに感想を聞かせていただくことができます。では、実際にこのパーティーを開催している当所の所員はどんな感想を持っているのか、みなさん聞いてみたいと思いませんか?そこで今回は、5月29日の朝に行った反省会の模様をちょっとだけ、のせてみたいと思います。

A: 今年は会場がちょっと狭かったね。

O: 雨が降っていたのに本当にたくさんの方が来てくれて嬉しかったね。

C: なんかにばたして終わってしまったって感じがする。料理もあまり口に出来なかった。

T: 挨拶もあまりできなかった。なんかパーティーに参加してたという気があまりしないんだけど。



料理でいっぱいになったテーブル



「人もうけ」の輪

「Z: 人もうけもせずに自分のことしか考えてないような人もいたな。もっと人もうけしてもらいたいね。」
 K: そう。たくさんの人と出会うというのが大事だからね。仲間内だけで座り込んでしまうのはちょっと困る。他の人が入りづらい雰囲気になってしまう。

G: そういうところは気を付けてもらうようにしないといけないね。
 ……とまだまだ反省会は続いたのですが、この辺にしておきましょうかね。(かじはらりか)

戦争終結後25年のベトナムはいま

1975年にベトナム戦争が終結して25年経ったベトナムは、今、東南アジアの発展地域として注目を浴びています。6月の雨期のベトナムを社内外の13名で訪ねました。



覆面の経済戦士が行く。女性の第一の敵はやっぱり太陽かな。

ベトナムはいま①

現代ベトナム戦争のフロントは
 覆面ライダーだった
 —ワンダーランド・ベトナムの印象—
 糸乗 貞善

●経済の拡大が第三次ベトナム戦争

今回のベトナムの旅で感じたことは、この国の中心テーマは「経済成長」にあるということだった。別に工場を見たりしなかったのに、街の表面を見るかぎり、中国の都市と同じような商業国家に見えたが、経済活動への意気込みが感じられた。

ホーチミンとハノイ間で乗ったベトナム航空の機内誌HERITAGEには、「WAR STORY」という文章が入っていて驚いた。書かれていることは先のベトナム戦争で戦争写真をとったりしたジャーナリストのことなので、世界中から集まったジャーナリストのことかと思っただけ、実際は当時のベトナム側の報道機関のことだった。しかし、先のベトナム戦争までが観光ネタになっていて、それも稼ぎに参加しているのには驚いた。つまり、戦争はベトナムにとって重要な「相続財産」として、今も重要な位置を占めているのである。

実際旅行ルートのひとつに「戦争証跡博物館」があった。私の世代は多かれ少なかれ、ベトナム戦争には強い印象を持っている。その最初はディエンビエンフーでのフランス軍との戦いで、多くの日本人はベトナム軍の勝利に喝采を送った。開高健の「輝ける闇」の中に、「簡単な算術なんじゃ。誰でも知っておるわい。

アメリカ人を引けばいいんじゃない。ここのニセの政府は一週間でつぶれる。戦争はそれで終わりじゃ。一週間もかからん。」「1945年にじゃ。ホーチミンは日本軍敗北の直後にじゃ。独立を宣言して臨時政府を樹立した。これを2つに分割することとなったのはフランスじゃ。簡単な算術だよ。フランスを引いてみるがいい。第一次インドシナ戦争はない。ディエンビエンフーもない。ジュネーブ協定もないのじゃ。次にアメリカじゃ。フランスのあとをついだアメリカじゃ。アメリカを引いてみるがええ。南の政府も、今の戦争もないのじゃ。」と述べる絶対反戦主義者のクエーカー教徒の話が出てくる。この彼は、自分の宗教信条にしたがって、仕事をすててベトナムにボランティアで支援に来ていたのである。今から考えると、これがアメリカのふところの深さだとも思う。

インドシナとフランスの戦争（これには裏にアメリカがいたことは周知のことで、兵器などはアメリカ製品が大量に使われていたことが博物館の展示でわかる）も、次の対アメリカの戦争も、結局のところフランスとアメリカが「手をひく」という作戦をとる以外に終結の道はなかったということになっている。ハノイでも「北爆」の話がいろいろな場面で出た。こういう遺産をふまえながら、今はすごい勢いでベトナムは経済に走っている。その最前線に覆面ライダーもいる。

●ホーチミン市の「戦争証跡博物館」

ここの印象をひとことだけ述べると、またしても「アメリカのふところの深さ」ということになってしまう。これは本当は皮相な見方であろう。

証跡として展示されているのはフランスとの戦争、アメリカ軍の残虐である。とくにアメリカ軍の戦争は、日本人を含む多くの命をかけた外国人ジャーナリストによって暴かれ、世界中に報道された（文字通り、多くのジャーナリストが命を落とした）。そのことがアメリカ軍の撤退、平和の回復に大きく寄与したと思う。この博物館でガイドから聞いた話が印象に残っている。ここは何度も名前を変えたり、展示物を変えたりしているという説明だった。

ベトナム戦争を列記すると次のようになる。

- ・1945. 9. 2 日本の敗戦と同時に一斉蜂起して、ホーチミンを主席とするベトナム民主共和国の成立。
- ・1954. 5 ディエンビエンフーの仏軍基地への突入・大勝。これまで8年間越仏戦争が続いていた。
- ・1955 フランス軍は協定にしたがって撤退したが、アメリカの強い干渉でベトナム共和国（南ベトナムのサイゴン政府）が成立。ジュネーブ協定による統一選挙は実施されず、17度線を境に南北ベトナムに別の政府ができた。ゴ・ディン・ジエム政府による反政府勢力の弾圧が伝えられ、世界的に関心を呼んだ。
- ・1960 南ベトナム解放戦線が成立、それぞれ呼応してアメリカが軍事顧問団の名のもとに参戦。一時は54万人にも達した。と同時に、アメリカ政府の要請によって韓国・オーストラリアなどの諸国も参戦した（※）。
- ・1975. 4. 30 サイゴンが陥落してベトナム戦争終結。
- ・1978. 12 カンボジア支援のためにカンボジアへ攻め込んだ。
- ・1979. 2 中国がベトナムへ攻め込み、中越戦争が始まる。3月に中国軍が撤退。この過去が博物館の名前にも反映されていて、中越戦争後は「米・中戦争証跡博物館」とされており、中越戦争の証跡も展示されていたが、中国との国交正常化交渉による国交回復に伴って、博物館の名称も今のようになり、展示物も中国軍のものは撤去されたということである。

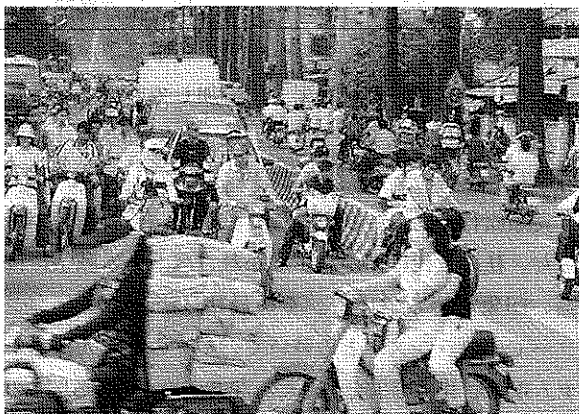
この博物館は、先に述べたように、対仏と対米の証跡のみが展示されている。

※前回ホーチミン市を訪れたとき、大声でわめかれた。対象は私であったような、隣を歩いている人であったような変な感じであったが、びっくりしたことがあった。何の意味かと同行の人にたずねたら、「韓国」のことを叫んでいるのだらうということであった。理由はベトナム戦争で韓国軍は徹底的に戦ったので韓国の人気が悪いということだった。今回はそんなことはなかった。外国企業は韓国・台湾・日本の順で多いといわれていた。

● “ホンダ”に席卷されたベトナム（親族で迎えうつ）

ホンダとはバイクのことである。ベトナムでは普通名詞として使われているので、街の到るところにHONDAという看板が、かかっている。これがどのメーカーのものでも2,800万ドンもする。100万～140万ドンの月給でどうして買えるのか。

ハノイもホーチミンも夜中の12時まで、バイクの洪水であった。1993年8月にホーチミンを訪ねたときは自転車を中心でありバイクは少なかった。それに引き替え、シクロはこの7年の間に大幅に減っていた。バイクの後ろへ乗せる商売は前回もあって、私も乗ってみたが（シクロの方が気分はいい）、今回もあるにはあったが増えているというほどではなかった。タクシーはかなり増えていた。以前にシクロに乗っていた人はどうしているのだろうか。結局“ホンダ”を買うか、自転車で我慢するかということのようだった。それにしても、高齢者などはどうしているのかな。月給の20倍もするホンダが買える意味がよく分からず、聞いてみた。その秘密は、おそらく儒教からきていると思われる家族主義と年4回のボーナスにあった。一回のボーナスは一ヶ月分の給料ぐらいで、その一年分（4回分）を合わせて、親族の間で頼母子講をすれば、



“ホンダ”があふれる

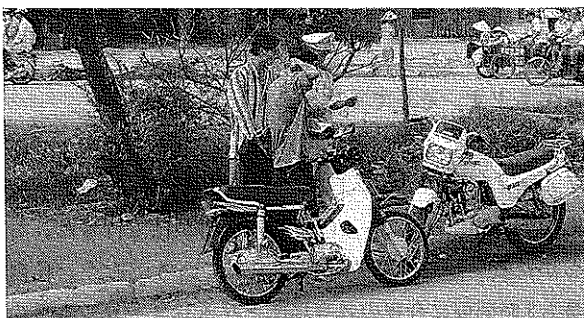
4人で16ヶ月分になるし、5人ならば20ヶ月分になるので、お互いに協力しながら手に入れていくのである。

ベトナムにはローンはない。その代わり親族が助け合うことになっている。ベトナムで会社を経営している日本の方にも話を聞いたが、「公」という概念は弱く、すべてが家族・親族の間の信頼で行動が決まっているということである。なんだか中国や韓国の話の聞いているような気がした。

<トピックス1>ベトナムには蚊がいなかった。という風な書き方をすると、ひと頃の「中国の蝇」みたいになるが、ホーチミン市南西のミトー市で、メコン川支流の「手漕ぎクルーズ」を体験した時も一度も刺されていない。小舟2艘がやっ行き交う椰子の繁った水路や、その乗り場にゆくまでの小路を歩いても蚊は見かけなかった。ハノイ市内やホーチミン市においても。前回は8月だったが、そのときにも刺されていない。本当のことを言うと、今回の私の心配事の第一は蚊であった。もともとアレルギー体質でアトピーも患ったことがある。日頃腰に蚊取り線香を下げている。首や耳のあたり十数カ所刺されることが日常である。その私が一度も刺されなかったのは最も印象に残っている。ひょっとすると、シーズンや時間帯で猛然と出てくるのかもしれない。



水路ですれ違う小舟



白バイにつかまった“ホンダ”はめずらしかった

<トピックス2>ホンダの洪水にも関わらず交通事故が少ないように思った。聞くところによると、全員が注意をしあっていて、ボケーとした人がいないからだということである。あのホンダの洪水の中でも、気合い（呼吸）がわかり、ゆっくり相手（やってくるホンダ）を意識しながら横断すると、お互い注意し合って安全に渡れた。この渡るとき歩行者（私）を、たくさんのホンダの洪水が呼吸をはかりながら、ゆっくりとかわして通り過ぎていく。なかなかの充実感がある。写真はミトーへ行く途中でやっと見つけた白バイの取締にひっかかった例である。

（いとりのさだよし）

ベトナムはいま②

麺には麺を葉には香菜を

ハノイ大学ファン・ク・デ博士の麺文化論

澤谷 真紀子

私がベトナム旅行で楽しみにしていたこととして、ベトナムの麺文化の話を聞くことがあった。

日本の無国籍料理店で、友人とベトナム行きの話をしていた時、1997年に出版された「もの食う人々（辺見庸、角川文庫）」を読めといわれた。それは、「アジアの庶民の食べ物事情を書いた本だったのだが、その中に「ハノイ大学のファン・ク・デ博士にベトナムのうどん文化についての話をうかがった（本文抜粋）」というくだりがあった。

「麺文化研究会の一員でもある私がこの機を逃してはなるまい！」と、とにかく今回のツアー会社である元気インターナショナル（おもしろいツアーを企画するところ）の財前さんにファン・ク・デ博士と連絡が取れないかお願いしてみた。

財前さんと現地の方の努力のお陰で、何とか約束を取り付け、今回のベトナムツアーの目玉とした。

実際にお会いした博士は、ハノイ大学に45年間お勤めで、商工会議所の会長をされているという、現地ではとても偉い方だったのだが、親しみやすい笑顔で、優しく、丁寧にベトナムの麺文化について次のようなこととお話ししてくださった。

・ベトナムのうどんは米で出来ており、「フォー」という。専門店で1杯が約6000ドン（1円＝約130ドン）。

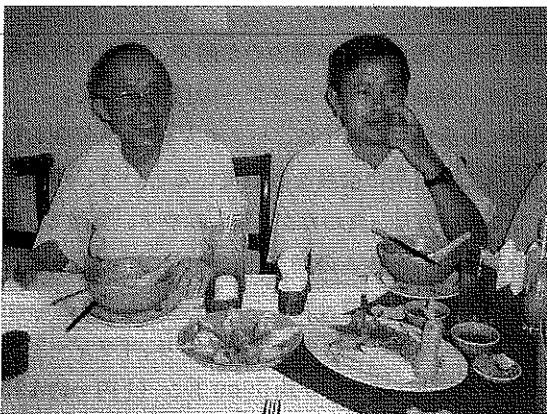


鶏肉のフォー。上品な鶏のだしで、香菜もたっぷり入っている。



牛肉のフォー。香菜をたっぷり入れて、塩漬けの牛肉がくせのある味をだしている。

- ・フォーには牛肉と鶏肉のものがある。元々は牛肉しかなかったのだが、フランス統治の頃、フランス人が好んで食べたため牛の数が少なくなり、1945年頃に鶏肉のフォーが始まった。
- ・近年、本来のフォーに卵やトーフ、ピーナッツなどを加えたものや、麺を揚げたり炒めたりした改良フォーが出回るようになった。
- ・また、フォーの味を決めるだし（本来は1日位、牛又は鶏の骨を煮込む）も変わってきており、薄いだしに「味の素」を使うところが多くなっている。
- ・家庭でもフォーは作るが、骨を煮込んだだしがなかなか作れないので、専門店の味にはかなわない（博士は奥様のフォーより専門店のものが好きだとおっしゃっていた。）
- ・ベトナム戦争時にはスープと麺だけのフォーもあり「運転手のいないフォー」と呼ばれていた。その当時アメリカのミサイルを搭載した飛行機にはパイロット（運転手）がいなかったかららしい。等私がまだ高校の制服を着ていた頃（10数年前）、ベトナムにあこがれるきっかけとなった本（※）に出会った。そこには、ベトナム人は食に対するこだわりが強い



ファン・ク・デ博士（写真左、右は通訳のチンさん）



（※）サイゴンから来た妻と娘（近藤絃一著、文春文庫）。ベトナム戦争時産経新聞のサイゴン特派員として駐在し現地の女性と結婚。ベトナム人の生活や考え方についてわかりやすく書いてある。

く、鶏も魚もウサギも家庭でさばく等ということが書かれていた。10数年前と現在では食文化がどのように変化しているのかについても聞いてみた。

現在も変わっていないことは、日曜日には友人や一族が集まって、1羽の鶏をさばいたり、ベトナムの煮込み料理を作っていることだ。変わりつつあることとして、加工品が増え、忙しく働く若者の世帯では、その利用率が高くなっているとおっしゃっていた。スーパーではインスタントラーメンやカップ麺、フォーのスープの素などがみられた。しかし、フォーの専門店も夜も遅くまで開いており、味も専門店とは違うため、カップ麺の売れ行きは良くないそうだ。

話の端々に奥様のことが出てくるのだが、博士の奥様は、朝食、昼食、夕食とも2時間位をかけて作ると満面の笑みでおっしゃっていた。ここにベトナム女性の料理のこだわりをみたような気がした。

（さわたにまきこ）

ベトナムはいま③

海外医療サービス体験記

尾崎 正利

●この窮状を何語で何と言えはいい

それは突然やってきた。数時間前からじんわりと胃の周りに不快感はあったのだが、先ほどから腹部に数分おきの猛烈な痛みがはしるようになった。焼いた鉄棒で胃の内側をゴリゴリと揉まれる感じ。痛みで上を向いて寝てもいられない。気がつけば目から涙が出ていた。痛くて泣いたのは入社2年目に受けた盲腸手術で麻酔が効かなかったとき以来だ。嘔吐感を感じてトイレでもどす。そして下痢。めまいもする。

場所はホーチミン市内で滞在しているホテル「パステル・イン・サイゴン」の312号室。時は暑い夕方。同室の者は30分前にあっけらかんと出かけて行った。おおかた買い物と夕涼みに繰り出しているだろう。私自身も1時間前に今夜の食事場所となるレストランを予約するなど元氣一杯だったのに。

上司と出かける約束の待ち合わせ時刻が迫るが動けない。受話器をとり上司にtelして約束を断った。続いてフロントへ。

「この窮状を何語で何と説明すればいいのか。」

「Hello.」(いきなり明るい声でフロント。しかも英語)

「すみません……」(しわがれ声で私)

「may I help you?」(何事か察したフロント)……

英語と日本語を取り混ぜた心細いやりとりで、なんとか通じた。1分後にドアがロックされて、ホテルのスタッフが駆けつけて病院に連れていってくれた。

●SOSというよく効き目のありそうな名の病院

手を引いて連れて行ってくれたのは同ホテルでセールス部門の責任者をつとめておられる日本人スタッフの徳島幸子さん。連れていかれたのは徒歩1分のところにある“インターナショナルSOS”という病院である。SOSは今の自分の気持ちにぴったりだ、などと鬱々と考えながら歩いて入っていく。

病院のレファレンスカウンターでは日本人のスタッフがいて、徳島さんから既に事情を聞いて受け入れ体制を整えて下さっていた。すぐに診察室へ寝かされる。

ベトナム人の若い看護婦が手際よく体温、脈拍、血圧を測定していく。時計を見ると部屋からフロントに電話してまだ5分しか経っていない。

そこへ颯爽とドクターが登場。日本人である。「いがぐり頭、ひげ、めがね姿」の風貌は私と同じだ。問診ののち「とりあえず今の痛みを緩和しよう」といって注射してくれた。そして、①感染症の疑いがあるので検便を翌朝必ず持ってくること、②同行者に同様の症状を持つ人がいないか確認する、③処方する薬の飲み方、④保険証書を忘れた場合の医療費の支払い、などについて繰り返し説明をうけた。

注射のせいか痛みはかなり引いてきた。支払いを翌日に回してもらい、来た道を再び徳島さんに連れて帰ってもらった。

ホテルに戻って旅行保険を契約している会社の在シンガポール事務所に電話をかけて、状況を報告し帰国後の払い戻し手続きに必要な資料を教えてもらう。夜になって上司の差し入れのオカユを有り難く頂いたのち安静した。

●ベトナムの医療事情はいかに

翌朝、同行の皆さんはメコンデルタツアー。楽しそうに出かけていくのをうらめしそうに見ながら、一人

だけ検便容器の入った袋をぶら提げて昨日の病院に行く。夕方4時に出た検査結果は“シロ”であった。法定伝染病、風土病などの感染症ではなかったのだ。体の調子は大分復活していたが、これでようやく気分的にも余裕が出てきた。昨日からお世話になっているドクターにお礼を申し上げた。

ドクターは横田清さんという方で、世界各地で医療活動を行うSOSインターナショナルグループのスタッフドクターだ。どういう訳でベトナムにいるのか尋ねると、今回は本来予定されていた別のドクターの都合で、短期滞在でベトナムに派遣されているらしいが、要請があればどの国にでも赴任すると答えて下さった。

この病院は“インターナショナルSOS”の名の通りベトナム国民だけでなく、観光客やビジネスマンとその家族など海外から来ている人に広く利用されている。レファレンスカウンターには10数種類の国旗のマークがあって、ベトナム語はもちろん、各国のお国言葉で医療サービスが受けられる。待合室に来ている患者の顔ぶれや飛び交う言葉も多彩である。私自身の前日以来の感想からいうと、体も心も弱って誰かにすがりたい気分のときに、日本語でやりとりできる医療サービスは随分安心できるものである。

しかし、横田先生の話によるとベトナムの人々がこうした医療を受けることは少ないという。特に手術を要する医療サービスは、医療費を払えるだけの所得を得ていない人が多いので受けられないサービスが多い。

そう言えばこの国では寺院にいくと亡くなった人の遺影が祀っており、写真をみていると若い人や子どもの顔が多いのに気づく。反対にお年寄りの姿はあまり見かけない。平均寿命は65歳くらいというが、志なかばにして病気で亡くなる方が多いのかもしれない。こうしたことからボランティアで診療活動を行う医師団も活躍しているということだ。

●医療・検査料はいくら？誰よりも高い買い物に

診察の結果だが、同行の皆さんと同じものを食べ、同じものを飲んでいたわけだから、腹痛と一連の下痢・嘔吐・悪寒は、単なる私の個人的な疲れによる胃腸炎だという結論に落ち着いた。あれだけ激烈な痛みで大騒ぎをした割には、随分あっさりした病名だった。渡された診断書にもそう書いてある(日本語でないから読めないが)。

そして最後に2日間の医療サービスの勘定書をみると

503
Medical Certificate

This is to certify that
Mr. DZAI HASATSHU
attended our clinic on 16/10/2000

He/she is suffering from
Acute gastroenteritis

☐ unfit for work / school from to
☐ fit for light duties from to
☐ fit to return to work / school on

Suggested review

Signed: [Signature] 503
An official of the Ministry of Health

もらった診断書
中程に「胃腸炎」と書いて
あるらしい

何と179.96US\$也(診断書の発行費込み)。無保険医療は高くつくものである。他にもホテルからシンガポールの保険事務所に国際電話をかけた通話料が18US\$請求されていた。手持ちは178US\$だけ……。

仕方がない。ホテルに走って行って上司にお金を借りて、再び走って戻って支払いを済ませた。小走りしながら「あっ！走れるくらいには快復したんだ」と思うと少しは気が楽になった。初の海外医療サービス体験は私にとって貴重な思い出になったが、今回の旅行中で誰よりも一番高い買い物をしたことになった。

（おざきまさとし）

ベトナムはいま④

危ないようで危なくない？

ベトナム交通事情

小田 好一

●町にはバイクが溢れている

ベトナム旅行初日はハノイであった。空港からハノイ市街までは約40分、現地の旅行会社が用意したミニバスで向かった。日曜日の夜に到着したのだが、カップルで2人乗りした「ホンダ」が道いっぱい走っていた。

ガイドの話ではベトナムには(バイクメーカーである)ホンダとヤマハが進出しており、ほぼ9割がホンダ製らしい。大きなスクーターも走っているが、ほとんどが日本でいう「スーパーカブ」である。70ccまでは免許がいらないので子どもでも運転していて、ほとんど自転車感覚である。ミニバスの周りを走行中のバイクはバスにぶつかるんじゃないかと思うくらい接近しても平気な顔をしている。車とバイクの割合は3:7くらいであろうか。車の数が少ない。バスは、四六時中パッシングとクラク

ションを鳴らしながらの走行である。市街に入ると、対向車線もなにもあつたものじゃない。バスはゆっくり走るバイクを追い越すため、対向車線に飛び出し、対向車線を走るバイクも追い越しのためにこちらの車線に飛び出している。おまけにほとんど信号がない。交差点に来たら減速して、しかし止まらずに周囲をよく確かめて通過する。それでもバスはクラクションを鳴らしながら、バイクをよけて走っていた。スリル満点だが運転する気は絶対におきない。ホテルに到着してホッとした。

次の日、朝5時頃からホテルの外でクラクションがうるさくなってきた。町中のバイクがやたらとクラクションを使うのである。朝8時頃、散歩に出かけた。道路を渡ろうとするのだが、信号もなければ、バイクの切れ目もなく、なかなか渡れない。前日のバスの中でガイドさんが「道を渡るときはゆっくり一定の速度で渡って下さい。急いで渡ったり、急に止まったりするとケガをします」と言っていたのを思い出して、これでもか自分の方へ突っ込んでくるバイクに注意を払いながら、恐る恐る道路へ出てみると、バイクの方も歩行者の動きを予測しながら、避けてくれるのである。ごく当たり前ののだが、「一定の速さで歩いて下さい」と言われた理由がようやく分かった。急にスピードを上げたり、止まったり予測できない動きをすると、バイクの方もどちらに避けていいのか分からずぶつかってしまうのだ。

旅行中に現地在住の日本人から聞いた話であるが、ベトナムの道路は信号もないし、いつ何時人やバイクが飛び出してくるか分からないため、常に周りに注意して走り、安全確保のためクラクションも常時鳴らす。逆に信号や歩道、横断歩道もある日本の道路では、運転



このようなバイクの嵐の中、意を決して横断する。



シクロの運転はハンドル（座席部分）が動かし難く以外と難しい

していても安心しきっていて、スピードも出だし、注意力散漫になって大事故になる。ベトナムの交通事情は危ないようで、以外に大事故にはならず、危ないのは日本の交通事情だという話を聞いて、納得した。

●肩身の狭い思いをしながら乗ったシクロ

「シクロ」という人を前に乗せる人力車がある。交差点を通過するときには多くのバイクが自分をめがけて突っ込んでくるため（ちゃんと避けてくれるが）慣れないうちはドキッとする。一緒に旅行に行った人3人で買い物をしていた、行きはタクシーを使ったのだが、帰りはシクロに乗ろうということになった。若いお兄ちゃんと、年輩のシクロマンがいた。値段交渉の末（この時は3km、3\$）シクロに乗った。3人の中で1番体重が重い私を乗せたのは、年輩のシクロマンだった。前日、ハノイで旧市街をシクロで回ったが、私だけ体重が重かったからか2人分のチップを払わされたこともあり、あまり乗りたくなかった。私を乗せたシクロは一番後ろを走っていたのだが他の2台とはどんどん引き離され、おまけに私のシクロマンは私の体重の重さからか息を切らしており、苦しそうだったので何度も降りようと思った。シクロマンも必死である。人を乗せなければ、金にならず、年をとって体力が無くなろうが若くて元気なシクロマンと運賃は同じである。町には空（から）のシクロが溢れており、一日一人乗せられるかどうかでその日の生活がかかっているのかと勝手に考えていた。

10分ほどして、ようやく目的地についたが運賃を払うと休む間もなくどこかへ走っていった。たくましい人たちだ。あらためて体重が増えてしまったことを感じた短い移動時間だった。（おだこういち）

ベトナムはいま⑤

骨董品にはご注意

小田 好一

社員旅行の行き先がベトナムに決まったのは、去年の冬頃だった。これまでの海外への社員旅行は韓国に始まり、その後中国など全5カ国。手軽に行けて人気のある国は、ほとんど行ってしまい、消去法に近い形でベトナムに決まった。入社1年目の時、台湾旅行の幹事を引き受けたこともあり、今回も幹事を引き受けることになった。

ベトナム旅行の旅費の相場を調べている時に、ベトナムの気候も聞いたのだが、計画した6月は雨期の真っ最中で「おすすめできません」と言われた。おまけに、出発前の旅行説明会では湿気が凄く旅行中に洗濯しても乾かないため、宿泊日数の倍以上の下着、洋服を用意すること、現地のミネラルウォーターを過信しないこと、その他にも注意事項がたくさんあり、まるで秘境を探検するような気分になった。

最も気にしていたのは天気だが、晴れ男か晴れ女が同行者に潜んでいたのか、旅行中全く雨が降らなかった。あまりにコトがスムーズにいくので（一名病院に行ったが）最後に何かあるのでは、と思っていたが、向こうを出国する時、それは起こった、ベトナムは自国の文化遺産の国外流出を規制するため骨董品の持ち出しに関してうるさいのである。糸乗の手荷物の中の3つの茶碗が税関で引っかかってしまった。実はこれは骨董品のレプリカであり、それを言い張ったが係員は「ジスイズアンティーク」と言って聞き入れてくれなかった。私は税関の裏で、できない英語で、どうしたら持ち出しができるのか聞いたが、全く通じなかった。それから係員は電話で専門家に茶碗の大きさやはじいたときの音など伝え、持ち出しの判断してもらっているようだった。結局、注意は受けたが持ち出すことができた。その後、出国手続きが済み、ようやく幹事の任務を終えた。あとは飛行機に乗るだけである。

今回の旅行では、ほとんど食事を付けてもらわなかった。食べ物が腐りやすい雨期ということもあって、きちんとした料理店での食事を勧められていたが、結局、ガイドさんお勧めの安くて美味しい店などに行った。所内には屋台派が多いのである。観光客が来ないような店で料理が出てくるたびにみんなで料理に向けてパ

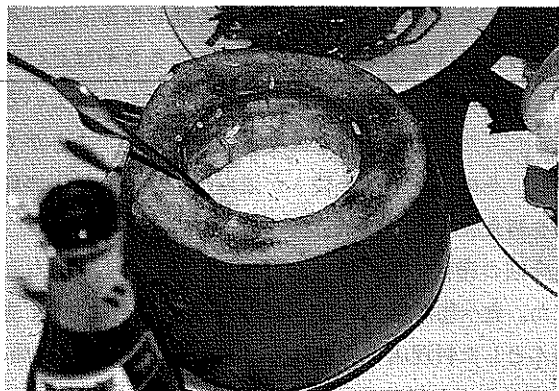
シャパシャとフラッシュを焚いていたので他の客には異様に映ったかも知れない。ベトナム料理は全般的に辛くなく、香菜をはじめ独特の味と香りで非常に美味しかった。帰ってきて写真の現像をしてみたら、料理の写真がほとんどであった。(おだこういち)



現地ガイドさんお勤め（ガイドさんも一緒に行った）の大衆食堂の料理。
料理を指さして注文する。どれもとても美味しかった。



ベトナム風!? 鍋物。日本のしゃぶしゃぶのようにサッと湯を通して食べるものではなかった。鍋の仕組みを見ると、真ん中の円筒のなかに炭火が入っていた。燃えかすは下に落ちるようになっている。中国をはじめアジアの国々にこの形の鍋が見られるが、真ん中の円筒は、本来こうやって炭を入れるためのものなのかも知れない。



椰子の汁で蒸したご飯。椰子の風味がほのかに香り、甘みがある。そのままでも美味しいが、カレーのようなスープをかけて頂く。椰子の甘さとスープの辛さが交わって非常に美味。



テーブルの上に球形の怪しい物体が現れた。左にあるビール缶で大きさがお分かりいただけるかと思う。



テーブル係のお姉さんが球を半分に切ると、球の下の部分に餅の塊が入っていた。素早く平たく潰し、たたんで、ハイッできあがり。表面がパリッとしていて中はしっとり、とてもおいしかった。しかし、これは、どうやってつくるのだろう。

第3セクター研究会活動報告

『みんなに喜ばれるリフレッシュ施設を 目指して～八女市べんがら村』

尾崎 正利

平成11年7月から第3セクターや市町村財政のことを調べてみようという目的で、伊東弘文教授（九州大学経済学部）を代表に研究会活動を行っている。

今回、6月10日（土）に福岡県八女市の温泉施設「べんがら村」を研究会のメンバーを中心に13名で訪れたので報告したい。

●ピーク・ボトム型から通年型へ。着工前のプラン変更。

この日、我々を迎えて下さったのは、㈱八女リフレッシュビレッジの野田国義社長、小川勲取締役、島本脩副支配人である。このうち野田社長は7年前に全国最年少市長として選ばれた現職の八女市長、そして小川取締役は現職の助役でもある。

当初、プールを中心としたウォーターレジャー施設の建設が計画されて、用地買収、実施設計まで済んでいた。しかし野田社長は、①農業振興を実現する農村

リゾートのまちにしよう、②都市の人が八女市に気安く来ることができる場をつくろう、③健康づくりの拠点をつくろう、と呼びかけて選挙戦に出馬して、市長就任と同時に計画の見直しをすすめ、現在の「べんがら村」へとプラン変更が行われた。

同施設は新聞にも何度か取り上げられているが、その特徴は、①農産物直売所と温浴施設の相乗効果が魅力になっている、②地元からの利用、外部からの利用ともに多くピーク・ボトムの差が少ない、③経営収支は好調で初年度、2年度は減価償却相当分を市へ寄付している、などが挙げられる。

「べんがら村」の事業内容と施設概要をまとめると概ね以下ようになっており、総事業費は26億4200万円である。

●予想を上回る利用者数は、魅力の組み合わせがウリモノとなったおかげ。

設立から現在までのいきさつについて野田社長と小川取締役から説明を受けた。

- ・温浴施設は誰でも通年で利用できる「とっつきやすさ」がある。八女市は花卉、野菜を中心に農業が盛んだが、市内の人々に温浴施設に来てもらうことで、地元の農産物に目を向けてもらうことを考えた。
- ・「魅力の組み合わせ」を大事にした。人間の喜びは分かりやすい感動にあると考え、夏はプールと地ビール、冬は温泉と野菜を生かした暖かい料理、をうりものにしようと考えた。
- ・施設の設計も空間の取り方、デザインに配慮してくれる横浜の設計事務所と契約した。当初、競争入札にすべきという意見もあったが、知的デザイン能力は入札にそぐわないので随契で行った。
- ・結果的にはリラックスできるスペースが広く確保できた落ち着いた雰囲気建物ができて、そのデザインは利用者に親しまれている。
- ・利用者予測を複数の専門家に委託すると16万8千人という数字であった。しかし実際は30～40万人(各売場などでの延べ数は平成11年度は71.8万人)となった。市外からの利用とリピーターが予想以上であった。
- ・「べんがら村」の施設の設置・所有者は八女市で、市と第3セクターが賃貸借契約を結んでいる。市場賃料よりは低く設定している。
- ・第3セクター自体の償却資産はないが、将来的な老朽化などへ対処するため、市の基金積み立てとして初

食の健康拠点施設

棟	階	規模・面積	施設内容	
東棟レストラン	1階	レストラン 80席 303㎡(うち厨房94㎡)	八女市で採れた新鮮な食材を活用したメニューと地ビールを提供。	
		地ビール工房 年間製造量80kl、国産の改良小麦設備	地ビールを生産し施設全体の集客力と利用効果を高める。4種類製造。	
リフレッシュ棟	2階	和風・洋風レストラン 和室96㎡(10人×4部屋) 洋室50㎡(10人×2部屋)	洋風、和洋風、兼備等の主にメニューを提供、各種メニュー、団体で利用。	
	1階	リフレッシュルーム (農産物直売所)	地元で採れた新鮮な農産物、加工品、伝統工芸品等を販売。	
		農村情報室	20席、40㎡ 本市の農業と特産品等について、ビデオ放映、DVD等の利用により、情報発信。	
		体験加工実習室 八女茶喫茶室	体験実習台4台 ガス台3台 20席、51㎡ 地域の食材を生かした農産加工品の体験実習を実施。 玉露、煎茶を最良の方法でお客様に提供、特産物の八女茶の普及・PR。	
	2階	大浴場	211㎡×2室(男女)、大浴場、八女茶風呂、和洋風呂、水風呂、電気風呂、サウナ	養生施設の一環として、天然温泉の効能により利用者の健康増進と交流の場。
		露天風呂	81㎡×2室(男女)	うたせ湯、桶風呂
		更衣室	114㎡×2室(男女)	温泉利用者の更衣室

※上記のほか関連施設として、ふれあい農園、駐車場、アクセス道路の整備を行っている。

八女市民プール

階	部	規模・面積	施設内容
1階	ミニスパ (家族風呂)	6部屋×33㎡ 備長炭風呂、灯籠風呂、天恵風呂、樟風呂、清流風呂、石風呂	家族等のコミュニケーションの場として活用。浴場内に伝統工芸品や備長炭を活用する等各風呂に趣向を凝らしている。
	リフレッシュルーム	100名収容 138㎡	運動(エアロビクス等)及び入浴後の休憩・相談等コミュニケーションの場。軽食と地ビールと簡単なつまみを提供。
2階	体験室	16.6㎡×3室	家族や団体が貸し切り制によりプライベートな体験室として利用できる。
	研修室	100人収容、120㎡	団体・企業等における、研修会、会議室、展示会場等として利用できる。
3階	フィットネススタジオ	50人収容 90㎡	700㎡、スタジオ教室等での活用により、健康増進を図る。
	トレーニングルーム	50人収容 90㎡	筋肉トレーニング及び体力強化用のマシンを各種設置。
4階	プール	大プール300㎡ 小プール73㎡	水深1.1～1.3mで250㎡のプールを6コース備える。小プールを併設。
	屋外親水施設	ビッグスロープ	ビッグスロープを備えた親水施設。

※上記のほか関連施設として、駐車場整備事業、多目的広場の整備を行っている。

事業費の補助金内訳

	食の健康拠点施設 (農水省・産業構造改善事業)	市民プール施設 (自治省・地域総合整備事業)	計
国・県補助金	783	—	783
補正予算債(80%交付税措置)	—	—	223
地総債(50%交付税措置)	223	641	641
一般起債	373	52	425
一般財源等	370	200	570
計	1,749	893	2,642

年度、2年度の純益の一部(5000万円ずつ)を八女市に寄付している。

- ・賃貸借契約のほか、夏季のプール施設は、運営委託(1800万円)を市から第3セクターにお願いしている。第3セクターでは市長、助役、収入役の役員報酬は出していない。
- ・補助金を受けた施設としての制約はあり、稼働後の改修一例えば農産物直売所の売場を拡げたいなどについては国・県ともに簡単には認めてくれない。
- ・オープン当初、市役所に苦情を持ち込む人もいたが、全て現場でキッチンと対応するように社内教育を行った。結果、接客サービスの質も上がり施設の評判も良くなった。
- ・課題として、地域において「べんがら村」が一人勝ちするのでなく地域全体への波及が求められている点、経営面ではレストランの収益性向上が挙げられる。レストランは誉め言葉と文句が一番多く集まる

2階の温浴施設とリラックスルームに上がって、ここで納得。畳敷きに低い机の大広間があり、絵に描いたような「入浴後の休憩」という風に利用者がリラックスしている。中高年だけでなく若いカップルも多い。部屋の入り口にはアイスクリームや地ビール、お弁当が売られており、どれも500円前後で気軽に購入できる。ヘンに格好をつけずに、ペタリとお尻を畳に落ちて着けられる場合は、日本人にとって一番リラックスでき

この「べんがら村」では野田市長が接客サービスや地ビールの味、料理などに指示を出すことも少なくなっていく。例えば「販売やレストランのホールなど持ち場の仕事だけこなせばよいということではなく、八女のガイドがつとまるくらいの勉強はせよ」などと言っているそうだ。そういえば研究会の前にレストランで食事をとったとき「鮎の塩焼き」というメニューがあったが、ウェイターにどこの鮎か聞くと、矢部川産の



10. *Journal of the American Medical Association*, 2000; 283: 2689-2696.

鮎で焼くと20～30分かかります」と即座に答えた。
「そんなに時間がかかるものかとも思ったが、食べてみると美味しい。」

「第3セクターが破綻した場合、自治体の出資金の範囲を明らかに超えた経営責任までもが自治体に押しつけられ、結局、将来に影響し自治体の財政を直撃するような負担を背負うケースもみられる。」

一方、「べんがら村」では日常的に社長以下が顧客サービスの充実を行うことで、施設の評判を最大限に高める努力をしている。「行政の介入を極力なくす」という当初の基本的なスタンスに対して、市との施設管理の委託、役員の報酬などの面で「やはり市が面倒みている会社ではないか」という見方をする人もいるという。

それでも、地域のリフレッシュ施設で地域の農業の活性化も進め、地域内の雇用を促進するという当初の狙いを達成した点で一つの成功事例であると思われた。

(おぎまさとし)

魅力ある学術研究都市をめざして

～九州大学学術研究都市シンポジウム～

井上 順之

6月1日(木)、福岡銀行本店大ホールで「新しい学術研究都市－知・住・悠の舞台の創造－」というテーマで、九州大学学術研究都市シンポジウムが行われた。主催は平成10年5月に設立された九州大学学術研究都市推進協議会(代表幹事／福岡県、福岡市、九州大学、(社)九州・山口経済連合会)である。会場には600人以上の参加があり、興味深く基調報告とパネルディスカッションに耳を傾けていた。

●基調報告

まず、九州大学学術研究都市構想検討委員会の委員長である慶應義塾大学教授の伊藤滋氏により、「21世紀の学術研究都市」というテーマで基調報告が行われた。概要は以下の通りである。

・九州大学学術研究都市構想は21世紀を先取りした学術研究都市づくりをめざして欲しいと思う。中央省庁も注目しており、特にIT産業やバイオ関連に力をいれるべきである。
・つくばの場合は、タウンとして様々な機能を集約させたが、情報ネットワークを頭に入れていなかった。

・また、関西の場合は、敷地がまとまらなかったため、分散させてネットワーク化を図ったが、あまりにも距離が離れていて、自動車に頼る方法しかなく、情報ネットワーク社会に対応していなかった。

・だからといって今回の構想は「まとめてつくればいい」ということではなく、駅と駅をつなぐハード面の整備よりも、九州大学の研究の質を向上させるといったソフト面の整備が重要視される。
・そういった意味でも、この九州大学学術研究都市構想は日本だけでなく世界中に影響を与える。世界を相手にするには、情報の統合を念頭に置き、ネットワーク社会に十分に対応した学術研究都市構想を進めていくべきである。

・また、つくばや関西の場合は、最終的な形をワンセットきちんとならなく不安であり、最初の目標をかえることはなかった。しかし、産業の進歩など将来のことは予想できないので、臨機応変に対応していくべきである。そのためにこの構想においては、フレキシビリティをもったものにすべきである。

・都心部にもキャンパスが必要である。最近特に社会人教育が活発になってきており、社会人学生が集まりやすい所にキャンパスが必要である。さらに非常勤講師として、ジャーナリストや科学者、行政の方などをよぶ場合にも都心の方が便利である。都心だと九州や日本だけでなく、海外からも講師を呼びやすくなり、教育の質も上がる。

●パネルディスカッション

次に「キャンパスタウンの夢を語る」というテーマでパネルディスカッションが行われた。パネリストは、九州大学ベンチャービジネスラボラトリー助教授の坂口光一氏、(株)西日本新聞社編集局長の玉川孝道氏、前原市長の春田整秀氏、東京大学名誉教授の渡邊定夫氏の4名で、コーディネーターは九州大学副学長の矢田俊文氏であった。以下パネルディスカッションの概要を紹介する。

・大学のあり方が20年が変わってきている。今までは国が中心となっていて行われてきたが、これからは地域という広がりの中で連携を進めていくべきである。
・大学の質は「R×L」で決まる。RはResearch(研究)、LはLife(生活)である。糸島での生活は住まいに限らず、アーティストの交流や刺激が必要であ

る。また、長いサイクルでのコミュニティ感覚や、ビジターも含めたコミュニティづくりが重要になる。

・大学の先生は「計画をつくる」ことは上手であるが、「どうやってつくる」という事が出来ない。地元や行政、大学の先生などで構成されるような少人数で自立的な場が必要である。

(玉川編集局長)

・九州や日本だけでなく、世界、特にアジアの研究者やビジネスマンにとって魅力的な学術研究都市になって欲しい。

・今の福岡は九州大学という知の拠点があってこそ、できあがった都市である。これからもその役割は変わらないどころか、ますます重要となってくるであろう。また、国の基幹産業においても九州大学の担う力は大きい。特に地域に対する貢献度が非常に高く、地域と九州大学は素晴らしい関係にある。

・九州には約100の研究所があるが、研究者はなかなかその土地に住みつかない。その原因として、下水道などのインフラ整備等が原因である。九州大学学術研究都市構想を成功させ優秀な研究者に福岡に住んでもらい、そこから通ってもらうようにする。

・現在、「九州大学に行く」というより、「〇〇先生に会いに行く」となっている。もう少し大学を地域に密着させ、研究者のレベルをあげるべきである。

(春田市長)

・地元としては、九州大学を迎え入れるために、道路整備などを行い、この学研都市構想を成功させたいと思っている。

・糸島地域には約10万人の住民がいるので、生涯学習など住民に対する知的サービスを求めている。また、大学が地域へのサービスだけではなく、糸島地域に

居住する高齢者などが大学で教えるといった、地域が大学へ行うサービスも必要である。

・九州大学が糸島地域に来ることによって、学生をはじめとする大学関係者が楽しいと感じるまちをつくりたい。

(渡邊名誉教授)

・九州大学学術研究都市構想の背景として下関から唐津に至る沿岸地域がある。その地域においての「知の拠点」として九州大学が果たす役割は非常に大きいと思う。

・九州大学に期待されているものが非常に高く、グローバルなネットワーク社会に対応した都市づくりが必要だと感じた。

・大学などの大型施設が移転すると、周辺の土地の値段が上がり、安い賃貸アパートやファーストフードが乱立してしまう。それを防ぐ方法を考えることも非常に重要である。

・大学のキャンパスには世界中から人が集まる。しかも勉強や研究のため何年かそこに居住し、糸島地域の住民と交流する。そういうことを意識したまちづくりをやるべきである。

(矢田副学長)

・18歳から20代前半という青春の時期を大学で過ごす。大学としては学生に良好な生活環境や様々な生活を提供しないといけない。また、今後の少子化により、学生を確保するためには大学の雰囲気づくりが重要となってくる。そのためには大学が単独で構想を進めるのではなく、大学と地域が一体的になることが不可欠である。

私は大学院も含め6年間、九州大学で勉強や研究を行った。卒業生の一人として、九州大学学術研究都市が世界に誇れるようになってもらいたいと願う。

(いのうえじゅんじ)

「川渡り神幸祭」での同窓会

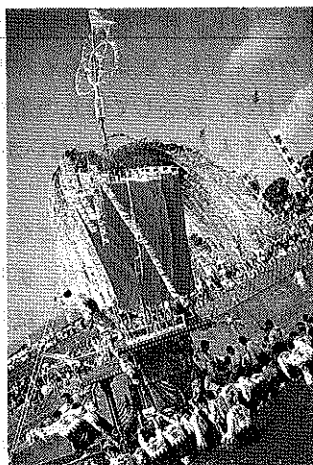
梶原 里香

焼けるような日差しとなった5月21日、田川市で毎年行われている「川渡り神幸祭」に足を運んだ。この「川渡り神幸祭」は、風治八幡宮の例大祭で、戦国時代の永禄年間(1558~1570)に病魔退散を願って始まったとされている。福岡県の無形民俗文化財に指定されている。かつては5月16日、17日に行われていたが(三井炭坑の給料日が15日だったため、それを祝って16日、17日に行うようになったというのも理由の1つにあるとのこと)、平日では神輿の担ぎ手が集まらないということから、昭和56年より5月の第3日曜日とその前日の土曜日にわたって行われるようになった。1日目は風治八幡宮を出発して、川の向こう岸にある御旅所へ向かう「お下り」が、2日目は逆のコースをたどる「お上り」がある。2日とも2基のお神輿と10基の山笠は川の中に入る。川の中に入った山笠は、3基ずつほど並ん

で競争をする。別のところでは、山笠が掛け声に合わせて大きく揺れている。きれいに飾られた山笠を見ているだけで圧倒されるものがある。

私は、田川市で大学4年間を過ごしたにも関わらず、「川渡り神幸祭」を観客の1人として見物したのは今年が初めてだった。というのも、大学在学中3年間は「リヤカー部隊」として参加していたので、ゆっくりと見物などしたこともなかったし、去年は就職活動中でそれどころではなかった。「リヤカー部隊」というのは、リヤカーに食べ物や飲み物、タバコなどをのせてお神輿の後ろについてまわり、お神輿の担ぎ手の方にそれらを配ってまわる仕事である。

福岡県立大学の学生は毎年、女子学生が「リアカー部隊」で、また男子学生もお神輿の担ぎ手として20名前後が参加している。今年も後輩の女の子3人がリアカー部隊として参加していた。知り合いの御輿会の方にお会いしたら、男子学生も担ぎ手として参加しているとのことだった。一度参加すると「また来年も参加します」という学生が多い。川の水はまだ冷たい上に、お神輿を担ぐわけだから相当疲れるはずである。リアカー部隊も、1人で何人もの担ぎ手の人に対応するのだから大変である。担ぎ手の人が川から上がってきたときが一番のパニックとなる（もちろん、リアカー部隊は川の中には入りません。念のため）。最近はお神輿を担ぐ機会があまりないから、貴重な体験になるのだろう。それに、毎年参加していると「今年も来たんだね。よろしくね。」と声をかけて下さる方がたくさんいる。自分も楽しめるし、参加している人はもちろん、見に来ている観客も楽しんでいるのが分かる。そして、毎年多くの人との出会いがある。それが楽しくて嬉しくて、私は毎年参加していた。



川の中で大きく揺れる山笠。この時期、水はまだ冷たい。

ちなみにもう1つ宣伝(?)するならば、「川渡り神幸祭」の翌週に、田川市後藤寺で「春日神社神幸祭」がある。このお祭りでは女神輿があって、女性がお神輿を担ぐことができる。女性がお神輿を担げる機会なんて滅多にないぞと思って参加し、1年生の時には担ぎ手として、2年生の時にはど素人にも関わらずお神輿の指揮者までさせてもらった。

さて、最初に「川渡り神幸祭」を見物にいったなどと書いているが、実はお祭り見物が目的で田川まで行ったわけではない。本当の目的は友達のお別れ会だった。ワーキングホリデーでオーストラリアに行く友達に「神幸祭見に行かない?」と誘われた。日曜日に仕事の入っていない友達や大学の後輩、3、4人に声をかけ日曜日に会うことになった。

しかし当日、主役は姿を見せなかった。仕方がないので、彦山川の河川敷に集まった5人で小さな同窓会をした。

一番会いたかった人には会えなかったわけだが、彼女のおかげでこういう機会がもてたことは感謝している。(かじはらりか)

地域の教育力のために大人が遊ぼう

伊藤 聡

福岡県の稲築町で「大人が遊ぶ会」を行った。これは、住民と町職員が参加した総合計画のためのまちづくり部会を行い、その中の教育文化部会の議論から生まれた行事である。教育については社会的な問題となっているが、旧産炭地域では住民の行政への依存心が強いため、より難しい問題となっている。稲築町も旧産炭地域のひとつであり、教育は子供の問題から親の問題まで根深い。

●教育レベルの問題で人が出ていく
ひとつの問題は、町内の小中学校の学力が隣の中心市より見劣りすること。郡部ではどこでもある程度似たような傾向かも知れない。しかし、学力の水準や学校が荒れていることが原因で、中学校に上がる子供のいる家族などでは隣の市に転出する者が出ている。どんなに生活環境を良くしても、教育環境がネックになって人が出ていくのである。学力については、学校の先生に負担がかかりすぎて

いるという問題も指摘される。学校は塾とは違い、子供の生活面や生き方までみる必要がある。親の問題から子供の日常態度の悪化も大きくなっている今日では、生活指導等に労力をとられ、勉強の方が思うように進まない。

●親と先生と子供の信頼関係が必要

生活面でいえば、子供は知ってる人の目がある中では悪いことはしにくい。悪いことをしていたら、知らない子でもまわりの親がしかるような地域の教育力が必要である。核家族化が進んだ現代では、親以外にも子供を気にかけてくれるソーシャルアंकル（社会的なおじさん）の存在は重要である。そのためには親同士の信頼関係、親と子の信頼関係が築かれていなければならない。

信頼関係の基礎として、お互いを知っていることが必要である。しかし現在では、地区内の人々のことを知らなくなっている。近所で子供が遊んでいても、どの子がどこの家の子か知らない。親がどういう人なのかさえ分からない。これは特に父親に顕著な傾向である。かく言う私も、自分の住むアパートにいる人をあまり知らない。

学校の先生との信頼関係も重要である。この町では、親が子供のいる前で先生のことを非難したり悪口を言ったりすることがよくある。それはマナーの問題でもあるが、親と先生の信頼関係をなくすばかりでなく、子供と先生の信頼関係も壊してしまう。

親、先生、子供の信頼関係がないと、しかってもの言うことを聞かず、指導しても非難され、親や先生はだんだん何もしなくなり、子供は軌道修正する機会を失ってしまう。地域が失いつつあるコミュニティを、現代なりに再生することが必要になっている。

●楽しい仕掛けで集まらないか

稲築町では地区懇談会という地区の集会があったが、集まりが悪く今は休止している。このような集会はいつしか形式的になり、限られた人しか集まらなくなる。新たに教育問題を話そうと呼びかけても、堅い話では集まらず、だんだん人数が減って立ち消えになるのはみえている。

同じ教育の話をするでも、あるいは地域の問題を解決するでも、何かみんなが集まる仕掛けをしよう、楽しいことで集まろうという考えが会議の中で出てきた。親と子がコミュニケーションをとろうにも、今の親

は遊び方を始め子供たちに教えるものをあまり持っていないし、相談に乗るのも上手ではない。多分、自分の生き方や考え方に自信がない、あるいは自分なりのものを持てなかったから、自分の言葉や態度で次の世代に伝えることができない。

●大人だけで遊んでみよう

こんな問題に対して、どういふ解決方法があるだろうと部会でカードを使ってアイデアを出したところ、惹かれるカードが一枚あった。「大人が遊ぶ」。

もちろん、夜の大人の遊びではない。子供時代にやったこと、あるいはやるべきだったことを、大人自身がもう一度取り戻すのである。

子供と遊ぶという考え方もあるが、子供と一緒にではどうしても子供中心になりがちで、大人同士の直接の関係が築きにくくなる。子供と遊ぶのは次の段階でいい。教育は子供が先か大人が先か、卵とニワトリのような問題ではあるが、まずは自分たちの問題として大人のことを考えよう、大人のコミュニティが地域の教育力になるのだから。ということで、子供とはなく大人同士で遊ぶことになった。

遊びも、なるべくかんげりや鬼ごっこのような体を動かす遊びがいい。その方がお互い性格も知って、腹を割って話せる関係になり、仲良くなれる。できれば学校の先生も入ってもらいと、より有意義だ。

●地域の教育力向上で家庭や学校の負担も減る

話を整理しておくと、大人が遊ぶことで、大人同士が知り合い、信頼関係が生まれ、子供に対する地域の教育力がアップする。遊びを通して大人と子供の接点ができ、コミュニケーションをとりやすくなる。それによって家庭の教育力がフォローされる。子供の生活面が良くなると、荒れた学校は改善され、先生の負担が減って学習の方に力点を置ける。競争原理の問題はあるので隣の市にはかなわなくても、成績もある程度向上する。そんな地域になれば、安心して地元の学校に通えるようになり、出ていく人も減るのではないか、という希望が見えてくる。

そういうわけで、「大人が遊ぶ会」を行うことになった。はじめは感触をつかむということもあって、まちづくり部会のメンバーや役場職員に呼びかけて、試しにやってみることにした。

●かんげり、ゴム飛び、ドッジボール

当日、集合場所の小学校に集まったのはとりあえず



大人も身軽にゴムとび

18名。かんけり、輪ゴムすくい、ゴム飛び、ろくむし(六文字が正しいという説も)、ビー玉、ドッジボールなどで2時間遊んだ。20代から50代までいたので、年代によってルールが違ったり、知らなかった遊びもあった。屋外での遊びは年輩の方が良く知っているとは限らない。ボールを使った遊びなどは、30代前後の方が詳しいようだ。

かんけりやドッジボール等は走ったりして激しく動くため、普段運動していない大人には大変だった。でもスピード感のある方が盛り上がり、子供の気分になれたようだ。

懐かしい遊びをして、ノスタルジックな気分になることが目的なのではない。これなら子どもたちと一緒に遊べるな、という自信が少し持てることと、大人同士の距離が縮まること、この人はどういう役割を好むのかというのが何となく見えてくること、そういった成果があるように感じられる。

●遊びを通して次の展開へ

目的からすると、地域ごとに大人が遊ぶ会を定期的を開いて、地域のコミュニティ再生と教育力向上を目指すことが望まれるのだが、それはこれからの展開になる。

遊びの会を通して発想すると、地域の伝統行事へのつながりや、新しい施設やあまり使われていない施設を使って遊ぶなども可能性としてみえてくる。

町の中心を流れる遠賀川には、最近親水公園が作られた。次は夏に向けて、水で遊ぶ企画を考案中である。

（いとうさとし）

沖縄の新たな一面にふれる

～西表先生 地域ゼミ～

梶原 里香

5月18日、「福岡で沖縄を通してアジアを見てみよう」というテーマで、香蘭女子短期大学助教授の西表先生による地域ゼミが開かれました。今回の地域ゼミは人気が高く、出席者は当所の所員も含めて22人にもなりました。

以前、当所の尾崎がアジア文化研究会で西表先生のお話を聞いたことがあり、そのお話がたいへんおもしろかったこと、また先生ご自身が「博多どんたく」の沖縄隊であるエイサー隊の指導をなさっていたり、古文書などの文化財保存の技術をお持ちであるということから、今回地域ゼミでお話をさせていただくことになりました。最初に先生の、「今日の話の一貫によっては、これまでみなさんが抱いていた沖縄観が少しでも変わるのではないかと期待しています」とおっしゃったので、一体どんなお話が聞けるのだろうと、とてもワクワクした気持ちで聞いていました。というのも、私は今までに一度も沖縄を訪れたことがなく、私にとっての「沖縄」というのは「ちょっと行くのには遠いけれど、いつか必ず行ってみたい憧れの場所」という漠然としたものでしかなかったからです。

今回のお話は、「日本も沖縄も元々は文化の根は同根である」ということを中心にして、沖縄文化系統論、沖縄文化（泡盛、陶芸、言語等）などでした。

その中でも私が一番興味を持ったものは、「沖縄の言葉・沖縄方言」のお話でした。先生が「みなさんが沖縄に対して抵抗を感じるのは言葉だと思う。言葉が分からないから、違う言葉を話す世界の人は何者か分からないということになって、沖縄が少し疎外的になるのだと思う。」とおっしゃったのですが、沖縄の言葉自体をあまりよく知らない私はあまりピンときませんでした。しかし、自分の知らない方言で話している人に会ったとき、「この言葉、私聞いたことないな」と思うのと同じことだろうなと思いました。

沖縄方言の中に九州の方言に似たものが残っていたり（例：「よもぎ」は筑後弁では「ふつくさ」と言い、沖縄では「フーチーバー」という。「貝」のことを柳川あたりでは「けい」と言うが、沖縄でも「けい」とい

う、など)、中国語と関わりのある言葉があったり(「チャンプルー」-料理の名前、「くーが」-卵のこと、など)して、沖縄の持っている歴史的な背景を考えずにはいられませんでした。

また、沖縄の言葉は変わってきている部分と、日本の古語の変わらない部分をずいぶん持っているということでした。沖縄が何故変わった音になるかということ、日本語の「あいうえお」の5つの母音が、沖縄では「あいう」の3つの母音に集約されているためではないかとのことでした(「こころ(心)」は「くるる」、「おび(帯)」は「うび」と発音するなど)。これは私にはとてもおもしろいお話でした。同じ日本語なのに、地域によってこんなにも表現の仕方、発音の仕方が違ってくるものなのだというのをしみじみ感じました。

そのほかにも、日本文化にある「5、7、5、7、7」の和歌に似たもので、沖縄では琉歌という「8、8、8、6」の短歌形式の歌があるということ、また「障子」のことを、日本では古くは「明かり障子」と言っていたが、今日では本土では下半分の「障子」といい、沖縄では逆に上半分の「明かり」というなど、沖縄方言が伝える古い日本語や日本文化についてもお話くださいました。

今回のお話を通して、改めて「日本語っておもしろいなぁ」という感想を持ちました。実は私は高校時代、大学で「日本語」の勉強をしたいと思っていたのです。自分が日常はなしている言葉なのに知らないことが多すぎる、というのが勉強したいと思ったきっかけだったのですが、今回の西表先生のお話を聞いたことで、またその気持ちがよみがえってきました。「沖縄」というと、同じ日本の中になるのにちょっと異国の雰囲気を感じてしまう私。今回のこのゼミでそんな意識はなくなっていました。最後に先生がおっしゃった「日本のふるいものを見るためには、沖縄を通さなければ復元するのは難しいと考えている」という言葉に重みを感じています。沖縄を訪れる機会があったら、ただの観光地としての視点で見るのではなく、同じ文化の根を持っているところ、という気持ちで、私なりにいろいろな共通点を見つけることができればいいだろうな、と思っています。

(かじはらりか)

お知らせ

■このたび、社名変更と同時にホームページを開設しました。この「よかネット」のバックナンバーも、全てではありませんがホームページ上でみることが出来ます。ぜひみなさん、アクセスしてみてください!!

http://www.yokanet.com

Mail: info@yokanet.com

なお「よかネット」のバックナンバーの特集号を作りました。ご希望の方は、ご連絡ください。メールでも結構です。

■前号に続いて、今号に郵送確認のはがきを同封しています。すでに投函された方は必要ありません。前号のはがきを出されていない方は、是非投函をお願いします。

編集後記

■今回は記事が盛りだくさんで、ページが過去最高になりました。編集担当は新人君でしたが、いろいろ雑音を聞きながらも何とか出来たようです。

■ベトナムは思っていたよりも日本人が多く、企業投資もこれから盛んになるようです。噂のシャワーを体験できなかったのが残念です。(べ)

■初めての「よかネット」編集は悪戦苦闘しました。でも、経験のないことをやるということに燃えるタイプなので、ぶつぶつ文句を言いながらも結構楽しんでやっていたような気がします。これからも新しい出来事との出会いの日々が続くのだらうと思うとわくわくします。何事に対しても好奇心旺盛でいられる今の気持ちをずっと忘れたくないと思っています。(り)

よかネット NO.46 2000. 7

(編集・発行)

(株)よかネット

〒810-0001 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハビエ5F
TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

http://www.yokanet.com

(ネットワーク会社)

(株)地域計画建築研究所

本社 京都事務所	TEL 075-221-5132
大阪事務所	TEL 06-6942-5732
名古屋事務所	TEL 052-265-2401
東京事務所	TEL 03-3226-9130